

2022年度 次世代人材育成事業

『多文化共生 × SDGs × 開発教育』
連続セミナー



報告書

主 催	公益財団法人 滋賀県国際協会
協 力	国際教育研究会 Glocal net Shiga
後 援	滋賀県 / 滋賀県教育委員会 / JICA 関西 滋賀県高等学校国際教育研究協議会 滋賀県青年海外協力協会

2022 年度 次世代人材育成事業 『多文化共生×SDGs×開発教育』連続セミナー

公益財団法人 滋賀県国際協会は、今年度から初めて、世界と自分とのつながりや私たちが暮らす地域について再認識することで、持続可能な社会づくりや地域の活性化に向けて、実際に行動できる人材の育成を目指す連続セミナーを開催しました。

【プログラムの概要】

日程・会場	内 容
第1回 7月17日(日) 【終日】 ピアザ淡海(大津市)	オリエンテーション 本セミナー、在住外国人の状況についての説明など 参加者同士の新たな出会い ➢ 開発教育についてミニ講義、ワークショップ体験「多様性理解」など
第2回 8月 4日(木) 【終日】 日本ラチーノ学院(東近江市)	ブラジル人学校の生徒との出会い ➢ ワークショップ体験「貿易ゲーム アレンジ版」など
第3回 9月10日(土) 【終日】 ピアザ淡海(大津市)	紛争問題を抱える国・地域出身者との出会い 【午前】 難民・避難民について学ぼう ワークショップ 《講師》公益財団法人アジア福祉教育財団 難民事業本部関西支部 支部長代行 中尾秀一さん 【午後】 内戦や戦争状態にある国から日本で暮らす方たちとの交流
第4回 10月15日(土) 【午前】 滋賀朝鮮初級学校(大津市) 【午後】 渡来人歴史館(大津市)	日本に根付く韓国朝鮮の歴史と今との出会い 【午前】 滋賀朝鮮初級学校 授業見学 & フリートーク 【午後】 渡来人歴史館 専門員によるガイドツアー
第5回 11月13日(日) 【終日】 モスク アンヌール能登川(東近江市)	ムスリム(イスラム教徒)との出会い ➢ 礼拝見学後、宗教的価値観、日本での暮らしについてなどフリートーク
発表会 12月17日(土) 【午後のみ】 ピアザ淡海(大津市)	発表会 ➢ 多文化共生についての講義「これからの多文化共生を知る・考える」 《講師》特定非営利活動法人多文化共生リソースセンター東海 代表理事 土井佳彦さん ➢ 連続セミナーでの学びから、今後のアクションプランを発表しよう！

【参加者について】

- 県内の高校生、大学生、現職教員、社会人など20人の若者が受講（うち、19人が修了）。
受講生の中には、海外ボランティア経験者（ブラジル・エクアドル）、中国出身者を含む。
- 滋賀県国際交流員（カナダ・ブラジル出身）、県内の留学生（中国・マレーシア出身）、外国にルーツを持つ社会人（中国・ブラジル）の8人がサポーターとして協力。

目 次

事業概要、参加者について	1・2P
活動記録アルバム	3～10P
各回セミナーの報告	11～39P
グループ発表（各グループのスライド）	40～49P
事後アンケートまとめ	50～58P
あとがき	

参加者名簿

【受講生（修了生）】

	名前			名前	
1	宮内 那緒	大学生	11	大森 香凛	高校生
2	楠居 里奈	公務員	12	佐内 愛佳	大学生
3	関口 皆実	大学生	13	西田 美和	社会人
4	藤川 真依	国際交流協会職員	14	濱野 優貴	高校教員
5	成田 実幸	高校教員	15	竹辺 このみ	小学校教員
6	渡辺 華水	大学生	16	松村 のぞみ	大学生
7	田中 里歩	大学生	17	永尾 陽菜多	大学生
8	村田 亮	公務員（小学校教員）	18	内木 晴菜	大学生
9	杉本 友恵	NPO 職員	19	周 佳依	社会人
10	甲本 将希	中学校教員			

【サポーター】

	名前	所属
1	エミリー ラモン カルディナル	滋賀県国際交流員（CIR） カナダ
2	ギマランイス	滋賀県国際交流員（CIR） ブラジル
3	清水 真央	元学習支援教室ボランティア
4	平田 イヴィ	国際交流協会職員
5	郜 健斐	びわこ奨学生 滋賀県立大学生
6	Ang Shuen	びわこ奨学生 滋賀大学生
7	陳 睿坤	びわこ奨学生 滋賀大学大学院生
8	DENG CHUHUI	びわこ奨学生 滋賀県立大学院生

* 「びわこ奨学生」…当協会外国人留学生びわこ奨学金支給制度「びわこ奨学金」を受給する留学生

【ファシリテーター】 国際教育研究会 Glocal net Shiga メンバー

担当回	名前	担当回	名前
第1回	大槻 一彦	第2回・第5回	川崎 功
第3回	中原 敦子	第4回	川辺 純子

活動記録アルバム

第1回 参加者同士の新たな出会い



開会あいさつ



自己紹介タイム「グローバルビンゴ（アレンジ版）」



集合写真



開発教育とはミニ講義 ファシリテーター 大槻一彦さん



フォトランゲージ



世界がもし100人の村だったらワークショップ



富の分配アクティビティ



非識字体験



ふりかえり

第2回 ブラジル人学校の生徒との出会い



あいさつ 日本ラチーノ学院 学校長 上村カイオさん



貿易ゲーム ポルトガル語のルールを読む



製品を作る



マーケットで製品を売る



ブラジルの給食



給食タイム



校内案内



ふりかえり



グループ発表



さようなら Tchou!



ふりかえり



グループ発表

第3回 紛争問題を抱える国・地域出身者との出会い



講師 難民事業本部 関西支部長代行 中尾秀一さん



何を持って逃げる？



難民になる？



ファシリテーター 中原敦子さん



仲間探しアクティビティ



シリア出身ゲスト ザッカリヤさん



シリア出身ゲスト スザンさん（オンライン）



スーダン出身ゲスト ラヤーンさん



ミャンマー出身ゲスト シュエさん



ふりかえり



グループ発表

第4回 日本に根付く韓国朝鮮の歴史と今との出会い



滋賀朝鮮初級学校 校長 鄭想根さん



校内・授業見学



授業見学



歴史について学ぶ



質疑応答



渡来人歴史館 専門員 大澤重人さん



歴史を学ぶ



ファシリテーター 川辺純子さん



ふりかえり



発表

第5回 ムスリム（イスラム教徒）との出会い



ファシリテーター 川崎功さん



イスラム教・モスク設立経緯について (一社)滋賀インドネシア友好協会 代表理事 モハマッド ヌズライさん



礼拝見学（女性）



礼拝見学（男性）



インドネシア料理



インタビュータイム（女性）



インタビュータイム（男性）



ふりかえり

発表会



発表会前の集合写真



講師 多文化共生リソースセンター東海
代表理事 土井佳彦さん



グループ発表



修了証授与 グループ1



修了証授与 グループ2



修了証授与 グループ3



修了証授与 グループ4



修了証授与 グループ5



ふりかえり



受講を終えて感想発表

集合写真



日本ラチーノ学院にて



モスク アン ノール能登川にて

各回セミナーの報告

受講生による記録をもとに編集しています。

第1回 参加者同士の新たな出会い

オリエンテーション、在留外国人の現状についての説明、受講生による自己紹介のあと、ワークショップ体験を行った。

実施日：2022年7月17日（日） 受講生：18名 サポーター：7名

会場：ピアザ淡海（大津市）

午後の部 ワークショップ「国際教育・ファシリテーター・フォトランゲージについて」

講師：国際教育研究会 Glocal net Shiga 大槻 一彦さん



はじめに、お互いを知るためのアクティビティ「グローバルビンゴ（アレンジ版）」を体験。

「開発教育とは国際教育とは」ミニ講義

1) 「国際教育」の変遷の説明

○1947年 国際理解教育の提唱

第2次世界大戦が終わるまで、各国は敵か味方かという対立的な捉え方をしていた。

⇒終戦後は各国が互いに理解することで壁を取り払うという考えが出現。

◆戦後日本の国際理解教育

ユネスコの「国際理解教育」とはかけ離れた教育方針が掲げられた。

①英語教育

…英語学習の時間を増やす

②移民の推進

…仕事を求めて、南米やアメリカ合衆国に日本人を移民させる

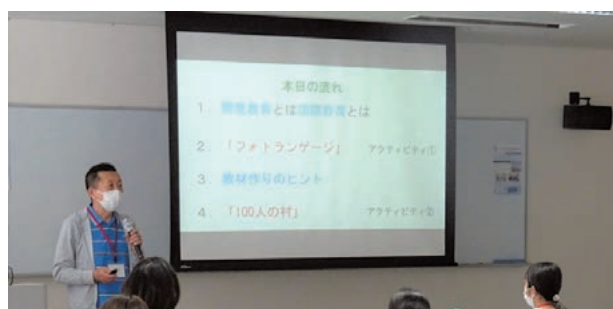
③帰国子女の受入れ

…海外で生まれ育った日本人児童生徒の受入れ

○1960年代 開発教育の活発化

先進国の若者たちが旧植民地の現状を調査し、南北問題が露見。先進国が支配するのではなく、開発援助を行うことにより問題解決に取り組むことになった。

北側諸国が作った経済システムのままでは南側諸



国の貧困は変わらないという考えが生まれる。

⇒北側諸国の考え方や経済システムを変えることにより、南側諸国の貧困の解消を目的とするように意識が変化する。

○1974年 国際教育

国際理解、協力および平和のための教育

⇒理解だけでなく、相互協力が国際平和には必要であるという考え。

○2005年 文部科学省「初等中等教育における国際教育推進検討会報告」

国際理解に加え、自らが国際社会の一員としてどのように生きていくかを考え、より主体的な行動ができるようになるという理念が掲げられる。

⇒社会問題への参画を促す教育が推奨されるようになった。

2) ワークショップとファシリテーターについての説明

連続セミナーの最終目的のひとつ：参加者からファシリテーターへ

○ワークショップとは？

学習者自らが参加し、体験し、集団内の協働や相互作用により発見と創造を生む学習方法。

従来型教育のような先生から生徒への一方向的な学びではなく、ファシリテーター（導くひと）と参加者の双方向的な学びの場のこと。

◆ワークショップの組み立て

①導 入：場の設定 アイスブレイキング、グルーピングなど

②展 開：場の活用 メインの活動を行う

③まとめ：場の共有 ふりかえり、シェアリング

○ファシリテーターの心得

①楽しさの奥に見え隠れする 「ねらい・意図」
何のためにするのか、何を参加者に学んでほしいのかを明確化する。

②効果は高いが万能ではない
時間がかかる、参加が難しい人がある。

③教えたい気持ちをこらえる
答えは一つではない。答えは参加者自身の中にあり、それをどう引き出すかに注力する。

④十分な準備とふりかえり
本番にならないと何が起ころかわからないからこそ、入念な準備と終了後のふりかえりが重要。

3) 実際にワークショップをやってみる：「フォトランゲージ」

○説明

- ・グループに分かれ、写真を見せる
- ・いくつか質問を準備して、グループ単位で意見交換
- ・各質問に対する意見が出終わったら最後に事実を伝える



○体験

Q 何を運んでいる？この写真の撮られた国は？

(意見) 日本？整備された道がある。タンスを運んでいるのではないかな？

海外？家が日本ぽくない。旅行者の荷物を運んでいるのでは？

(解説) 約20年前のネパール。シエルパさんという山の運び屋さんが旅行者の荷物を運んでいる様子。

Q運び屋さんのなり手が減少している。その理由は？

(意見) 若者が都会へ出るようになったため
ヒマラヤで大災害が起こった
ほかの稼げる仕事ができた

(解説) 他国に出稼ぎに行った方が稼ぎがよい
ため多くの若者が出稼ぎに行くようになった。

○参加者からのワークショップを体験した感想

- ・一枚の写真を見るだけで、これだけ意見が違うことに驚いた。
- ・ネパールや同じグループにいた方の国の平均賃金を聞いて、各国にまだまだ大きな賃金格差があることを知れてよかった。
- ・一枚の写真を見るだけでいろいろな意見が出て、とても面白かったので、自分の職場でも同様にこのワークショップを行ってみたい。

ワークショップ「世界がもし100人の村だったら」

1) 「世界がもし100人の村だったら」のルール説明

- ・世界人口を100人に縮小し、様々なデータを用いながら、参加者が100人村の村人となって参加するシミュレーション教材を体験。
- ・個々の村人の設定が記載されたカードが一人に一枚ずつ配布され、村人になりきるという指示がだされた。
- ・100人の村の住民設定
⇒①性別 ②年齢 ③現在の言語 ④将来の言語
⑤住んでいる地域 ⑥家計レベル
⑦将来の家計レベル ⑧言語による指示



2) 「世界がもし100人の村だったら」体験

言語の分類

- ◆受講生が互いに挨拶を通して同じ言語を話す仲間を見つける。

中国語、ヒンディ語、英語の順に住民が多い。一方で、少数言語の住民は半数に及ぶ。
⇒世界には多数の言語が存在することへの気づきが生まれた。

◆将来使用する言語別に分かれる。

少数言語を話す住民が次々と英語を話すグループへと移動した。

⇒共通の言語によってコミュニケーションが取りやすくなる一方で、多くの言語が消失する状況にある。

○言語の消失についての参加者の声

- ・文化の継承が途絶えるおそれがあるのではないかな。
- ・母国語だからこそ自分の感情を表すことができる面もあるため、形式的なコミュニケーションに陥ることは寂しい。

家計レベルの分類

◆住んでいる地域ごとに富を表すラムネが配布された。

北米、アジア、ヨーロッパ地域のラムネの保有数が多い。1人につき2つ以上のラムネを得ることができた。一方で、アフリカは複数人の住民の中にラムネが1つしかない状況であった。

⇒南北の貧富の差が顕著に表れた。アジアは日本が富の大部分を保有していることから、同じ地域の中にも富の偏りがある。

○家計レベルの分類を通しての参加者の声

- ・わびしい想いをしたくない。
- ・富の分配がなされてほしい。

指示語を通した識字体験

◆言葉が読めないと指示を理解できない体験。識字できない（読めない）言語を頼りに薬を選択する。

⇒言葉が読めないと、正しい選択・行動が難しい。災害に遭ったら…薬が必要になったら…、雇用契約書の説明が分からないと労働者が不利益を被ることもある。



3) ワークショップを通して ふりかえり

- ・開発教育を進めるために、そして課題の解決のために今後どうしていく必要があるのかグループで意見交流を行った。



○参加者の声

- ・多くの人が現状を知ることが必要である。誰かに伝えるためには、まずは自分が知ることやめない。そして、伝える手段として身をもって体感できるワークショップ等を活用していきたい。

⇒ワークショップを行う時には、参加者に気持ちを尋ねる機会を設ける。その場で感じた気持ちを尋ねることで、より参加者が身をもって体感することができる。

- ・貧富の差をなくすためには、誰もが働ける環境を創ることが必要である。

⇒途上国で仕事をつくる、自分で稼げる環境・制度を整える。

⇒富を分配することも求められるが、富がある人にとっては悔しい想いをすることもあっていいのではないかな。

- ・言語、貧富の差の両問題を解決するには教育が重要な役割を果たすのではないかな。

⇒言語指導において、知識を教えるだけでなく、読めないことに対する不安な気持ちを共感する姿勢も大切であると考えている。

感想

ワークショップを通して、開発教育について多様な視点からの意見交流が行われた。理解することにとどまらず、行動を起こすことに目が向けられた交流であった。

第2回 ブラジル人学校の生徒との出会い

県内のブラジル人学校を訪問し、9・10年生とともにワークショップを体験。学校へ向かうバスの中でラチーノ学院の概要説明および、ミニ・ポルトガル語講座を受けた上で交流に臨んだ。

実施日：2022年8月4日（木）

受講生：14名 サポーター：4名

会場：準学校法人 日本ラチーノ学院 (<https://latinogakuin.com/about/>)（東近江市）



日本ラチーノ学院
校長 上村 カイオさんより
ポルトガル語で挨拶

挨拶の内容

学校では2歳～18歳まで幼稚園から高校までの教育を行っている。生徒は滋賀県の様々な所から通っている。生徒は送迎バスに乗ってきているので、ここに来るまでに長い旅をしてきているので、朝食、昼食も学校で食べている。

ポルトガル語で授業を行っているが、日本語の授業も実施している。今回、この交流をととても嬉しく思っている。日本の社会に馴染みをもってもらえるよう期待し、来てくださったことに感謝している。ぜひ今回の交流では子どもたちとブラジルの給食も楽しんでほしい。ぜひ、また遊びに来てください。



左が校長先生。右は県 CIR の通訳者。

ワークショップ体験 「貿易ゲーム（アレンジ版）」

講師：国際教育研究会 Glocal net Shiga
川崎 功さん

午前の部

グループごとに配布された封筒の中身を使って製品を作り、マーケットに売ることにより多くのお金を稼ぐゲーム。今回は、ポルトガル語版のルールのみ使用するアレンジ版を体験。

1) 自己紹介タイム

・バスの車中で予行練習したポルトガル語講座を生かし、ラチーノ学院の生徒さん数名と1対1で自己紹介をした。

2) グループワーク「貿易ゲーム」ステージⅠ

（場面設定：1989年頃 入管法改正の頃）

ステップ① 1グループ 3名～4名に分かれる。

※名札の裏にアルファベットが書かれてあり、しゃべらずに同じグループの仲間を見つける。

※ラチーノ学院の生徒と受講生とが一緒になるグループ分けで、日本語で会話できるグループ、片言の英語で会話できるグループ、流暢な英語で会話できるグループなどが見られた。

ステップ② 各グループに袋が渡される。

※袋の中身は、説明書（ポルトガル語で記載）、文房具、お金、白紙の紙が入っている。

・文房具は全てのグループに同じものが入っているとは限らない。定規、のり、はさみなどグループによって入っているものや数が違う。（ちなみに私のグループは定規が2つのみ。）

ステップ③ 説明書（ポルトガル語版）を読んで作業開始

・説明書はポルトガル語のみでしか書いていない。そのため、ポルトガル語がわかるラチーノ学院の生徒が日本人の参加者に説明してくれる。（ポルトガル語が全くわからない私は、最初絵で表示してあった四角と三角と丸を紙で作って、車を作るといことしかわからなかった。車という単語は car という表現でなんとなく理解する。あとは、何をするかさっぱりわからなかった。しかし、同じグループのラチーノ学院の生徒が一生懸命に書いていることを説明してくれた。おかげで、何をするか見えてきた。どこのグループも状況は同じ様子。）

- ・車を作るには、長さを測って、紙を切る必要がある。直径 2cmの丸を 4 つ、一辺が 4cmの 30 度と 90 度の三角形を 1 つ、1 辺が 3cmと 10cmの長方形を 1 つ作って貼り付ける必要がある。しかし、道具が揃っていないので、長さが測れても紙が切れない。のりがないので、貼れない。円型パーツが作れないといった問題が起きる。



ステップ④ 交渉

- ・車を作る為に必要な道具を集める。自分たちが持っている物を他のチームと交換・売買したりする。交換や売買に関しては特にルールなどはない。

※この際、各チームに移動して交渉できるのはラチーノ学院の生徒のみ。

(私たちのグループは定規が 2 つあったので、ラチーノ学院の生徒がその内 1 つをのりと交換してきた。しかも、お金ももらってきてくれたので、チーム皆が驚きと喜びの雰囲気になったが、どのように交渉してきたのかすごく気になる。定規で長方形のパーツは作れたが、丸のパーツと三角のパーツが作れず、午前中の時間が終了する。ちなみにカットは定規で切った。他のグループの進捗状況は、動きまわることができなかったためわからなかった。)

3) ラチーノ学院の給食タイム

本日のメニュー

- ・白ご飯
- ・サラダ(ヨーグルト味の手作りドレッシングを添えて)
- ・Estrogonofe De Frango (チキンストロガノフ)
- ・ポテトチップス
- ・デザート (Torta Cremosa com farofa crocante)

※どれも美味しく全て完食。2 名の方が毎日、メニューを考え手作りの給食を提供されている。



4) 学校見学

ラチーノ学院の生徒が各々学校を案内してくれた。



感想

なぜ、8 月に学校に行って交流ができるのか、とても不思議だった。学校は、「8 月＝夏休み」と思っていたので、わざわざこの交流のために生徒が学校に出てきてくれているのかと思っていた。しかし、校舎内を見学している際に、ふと学校の休みの話になった。ラチーノ学院は夏休みがないとのこと。ここでも文化の違いを感じた。国によって長期休みが違うのだ。私たち日本人が海外の学校に転校する時には、日本の常識は通用しないのであろう。もし、

私が海外の学校に転校したら、夏休みがないという感覚だけでも、慣れるのに時間がかかりそうだ。文化の違う国から日本の学校に転校してくるのはどんなに大変な事なのだろうか…

午後の部

5) グループワーク「貿易ゲーム」ステージⅡ (場面設定：2000年)

《場面設定およびルールの追加》

2000年という時代は、テクノロジーの発展、グローバル化が進んだため、スマホの使用が認められた。

追加情報：

- 電気自動車の需要が高まる。
(色付きの紙で車を作ると値段が3倍)
- 日本人の人材の需要が高まる。
(日本人が売りに行くと値段アップ)



感想

午前の部に比べて情報が流れた際には、やる事がより明確になり活動が活発になった。また、午前ではラチーノの学生に日本人が頼る形になっていたが、午後からは互いに意見を伝え合うことができ、より協力関係が芽生えたと感じる。特に完成した車

を売りに行く場面ではそれぞれの国の個性が出ていて、特技を披露するなど、一生懸命説得している様子が印象的だった。

反省点としては、携帯の翻訳ツールが使える中で、あまり活用しなかったため、日本人とラチーノの学生同士で活発に意見が交わせなかったことだ。互いにしっかりと作戦やアイデアを共有することでよりゲームを成功に導くことができたのではないかと考える。

結果発表

いずれの国（グループ）も、午前の1989年設定時より収入が大幅に増加した（情報をうまく生かしたからか？）

A	49	652	F	0	510
B	25	420	G	0	423
C	2	405	H	-1	324
D	15	382	I	5	79
E	7	175	J	2	82

感想

国によって収入の増加幅にかなりばらつきがあったが、成功した国と失敗した国の動き方をもっと見ておくべきだったと反省。ただ、どの国も午後のほうがかなり収入は増加した。午後に出された追加ルールによって動きが明確になり、より稼ぐことができたのではないだろうか。活動中はグローバルな中で、自分の国の利益を一番に考えていた。それぞれの国の資源（材料や道具）を活かし、それぞれの国で車を作るのではなく、国単位で役割分担すべきだったのではないかと感じた。2000年の時代には他国を観察し、どのように交渉し、協力するのかという点がゲームの成功の鍵を握るのではないかと考える。

6) ふりかえり①

各国でゲームの感想などを話し合い、白い模造紙に発表内容を記入、各国のラチーノ学院の生徒が一人発表した（言語は自由）。



発表内容

[よかった点]

- 違う国と互いに協力できた。
- 売り場の審査にうまく交渉して稼ぐことができた。
- 楽しめた。情報を活かしてたくさんの車を売ることができた。

[悪かった点]

- もっとほかの国と協力すべきだった。
- コミュニケーションでの困難さに苦労した。

など



7) ふりかえり②

ラチーノ学院の生徒が下校した後、受講生のみでふりかえりを行った。

「ファシリテーターとして大事なこと」、「異文化交流の企画を行う際に気をつけること」についてグループで話し合い、発表を行った。

ファシリテーター 川崎さんのコメント

ファシリテーターというのは、この場だけの役割ではなく、今日を迎えるまでのプランニングをする、いわば脚本家。場の設定にはじまり、今日の目標、何を参加者に感じ取ってもらいたいかをはっきりしておくことが必要である。

今日のねらいは、みなさんに1989年当時、入管

法改正を契機に来日され、言葉の面などで苦労されてきたブラジル人の方たちの気持ちを体感して理解できるようになってもらうこと、そしてブラジル人生徒たちにとっては、日本人と交流をしてもらう場となることだった。

異文化交流を行う際に一番大切なのは、『相手を受容する力』。みんなが安心して伝えられる雰囲気・環境をつくることができれば、あとは何とかできるので心配いらない。

感想

ふりかえりの際の意見交換では言語の違いがあることで互いの意見を伝え合うことが大変だった。ゆっくりとジェスチャーを交えて話すことが重要だと気付いた。シンプルだが、ラチーノの学生たちが楽しんでくれ、異文化交流に対して肯定的な意見を言ってくれたことに対してとてもうれしかった。互いに意思の疎通が難しく、もどかしさ、申し訳なさを感じるときもあったが、最後には「楽しかった」という言葉が聴けて、とても気持ちがよくなり、この経験の意義を改めて感じた。活動の中で障壁はあるものの、互いに受容し、尊重し合う気持ちが大切だということを学んだ。



第3回 紛争問題を抱える国・地域出身者との出会い

午前は難民事業本部から講師を招き、難民・避難民について理解を深めるワークショップを体験した。午後は、シリア、スーダン、ミャンマー出身のゲストを招いて、直接お話を伺う機会とした。

実施日：2022年9月10日（土）

受講生：17名（うち、2名はオンライン参加） サポーター：6名

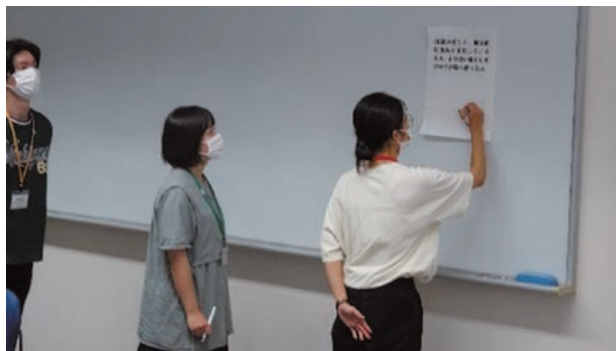
会場：ピアザ淡海（大津市）

ワークショップ「難民・避難民について」

講師 公益財団法人アジア福祉教育財団 難民事業本部関西支部 支部長代行 中尾 秀一さん

ワーク① 難民って、どんな人？

まずは、会場内に貼られた5つのケースについて、難民と思うかどうか、時計回りで個々に「○か×」を記入するよう指示があった。



難民の定義について解説があった。中心にあるのは1951年にできた難民条約だが、国際法上、難民の絶対的な定義はなく、国連や国際社会が保護する人と日本政府が受け入れる人にはズレがある。難民条約以外のルールに照らすと、内戦を背景として逃げてきた人は外れてしまうということがあり、それを補完的保護というが、日本の国会では「補完的保護」についての法整備が遅れており、ウクライナの人たちは、条約上の定義からは外れるが、受け入れることになったので「避難民」と読んでいっていると説明があった。



難民の定義の内、国内で逃げている人は「国内避難民」と呼ぶ。毎年 UNHCR が6月に発表する Global Trends からの数字によると、2021年末現在、8,930万人、圧倒的に国内避難民が多い時代が続いている。

ワーク② 祖国を離れる時、何を持っていきますか？

グループで相談し、3分以内に5つ考える。さらにその後2つに絞り込むよう指示があった。

各グループから出た意見

- 水・食料、パスポート（身分証明）、お金、寝具、スマホ（PC）
- 身分証明書、タオル（防寒、止血）、食料、服、お金
- パスポート（身分証明）、お金（なんとかなるか）、食料（2日分安全なところへ行ける日数）、下着、携帯
- スマホ（情報得られる、証拠動画など）、身分証明書、万能ナイフ（植物を切って食するため）、お金、薬（持病の薬）
- 水（生命維持のため）ひとり2リットル、お金、食料、身分証明書、ライト（夜用に）
- お金（何かを買える）、身分証明書（他の国で国籍を証明するため）、携帯、食料、服



中尾) これには、正解はない。実際の難民の方たちも状況(出身地、季節、紛争発生からの経過時間、家族構成等)により持ち物は異なる。

実際の難民の持ち物を写真で紹介された。

難民を出している国の上位10か国で、世界の難民の8割になる。これらの国の共通点は2つ、①紛争がある ②経済的に豊かではないこと。1979年以降ずっとアフガニスタンが1位だったが、2010年にシリアが1位となった。現在、ウクライナがシリアに匹敵する数になっており、世界全体では1億人を超えている。

難民を受け入れているのは、7割が隣の国。難民は徒歩などで移動するため、そんなに遠くに逃げられない。たいてい隣の国も貧しい国である。また、難民の40%が子どもである。

ヨーロッパを目指す人たちの最近の傾向として、スマホを持っている人が増えた。情報が大事になっていることが分かる。悪質なブローカーも横行しており、高額な費用を取られたり、人身売買されるケースもある。しかし、逃げている人はリスクを理解しているが、移動せざるを得ない状況に置かれているということ。

難民条約の一番大事なルールは強制送還禁止。命にかかわるため、自発的帰還しか認められない。内戦などが続く国では帰国の目途が立たないため、庇護国で難民としてではなく、定住するという解決手段も出てくる。ただし、庇護国自体も経済的に豊かではないので、定住は難しいため、第3国定住という3つ目の手段があるが、チャンスが少ないのが現状。そのため、10年ぐらい庇護国で暮らすことが一般的で、難民キャンプでの生活も数年単位となることから、難民キャンプでは、食料、シェルター、医療、水、初等教育が保障される。

ワーク③ 難民になるか、故郷に留まるか？

設定された状況を読み、自分たちは難民になるか、故郷に留まるかを、家族構成や経済状況、避難する先の状況などの要因を考慮してグループで決定した。



紛争が原因となる難民が多いので、どの程度武力紛争が近づいているかによっても判断が異なる。ウクライナはPushファクターが強い。今も攻撃が続いている。ウクライナはヨーロッパの中では貧しい国だが、世界の経済順位では70位なので、経済的に移動能力が高かったため、大規模な人の移動が起こっている。すでに、1,800人が来日。毎週航空機1便で、一日20人の席を日本政府が提供している。

感想

午前の部のセミナーを受けて感じたことが2つある。

1つ目は、難民になると決断することは容易ではないということである。今回のセミナーでは家族構成が設定された中で、難民になるか、故郷に残るかを考えるワークがあった。私のいたグループでは、家族の年齢や経済的な状況、迫害の程度、隣国へ逃げた時の見通しなどの与えられた状況から考えられることをできるだけ挙げて話し合った結果、故郷に残るという選択をした。その選択の決め手となったのは、迫害を受けるまでにできていた国内の個人的な繋がりを頼ることができるのではないかとということであったが、このワークが終わってからもう少し状況を具体的に想定してみると、隣国との戦争下で誰もが命の危機にさらされている中で、自分自身や家族を生かすのに精一杯なのではないだろうか、他者を頼ることができるのであろうかという考えも浮かんできた。また、故郷に残ったことで更に迫害を受ける危険も十分にある。しかし、難民になると決意をしても国外へ出ることや目的とする国に到着することは決して簡単ではないということを踏まえると、難民になると決断すること自体、難しいことであると感じた。セミナーの中で、難民になる要因には国内の危険な状況等のPUSHファクター、国外の受け入れ体制などのPULLファクター、そして社会的、経済的、身体的なMOBILITYがあると学んだが、このワークを

したことで、更にここに心理的な要素も大きく絡んでいるのではないかと考えた。

2つ目は、庇護国の責任の大きさである。セミナーの中で、難民の定義は国際的なものと日本が定めているものとは異なる点があるという話を伺った。日本の受け入れの条件のいくつかを知った時は厳しいと感じた一方で、庇護国としての責任を果たすためのものと捉えることもできるかもしれないと思った。しかし、庇護国として多いのは途上国のような国であるということを考えると、難民支援について更に日本が国としてできることもあるような気がした。さらに、最近では途上国で難民キャンプを設置した時にはキャンプ内だけでなく周辺の経済的な支援をするなどの取組もされていると知り、環境を整えることの重要性を感じた。

今回のセミナーで難民について学んだが、まだまだ分かっていない部分や疑問に思ったことが多くある。変化の激しい時代であるがゆえに、難民にかかわる課題は決して他人事として捉えることはできないと思う。これを機に難民についての日本や世界全体の取組をもっと知らなくてはならないと思った。

午後の部

ファシリテーター

Glocal net Shiga 中原 敦子さん

アイスブレイク

概要：①仲間探しアクティビティ 参加者同士で共通点を見つけてグループを作る（言葉は使ってもOK）

⇒学生、社会人、外国人という3つのグループが作られた

②参加者が目をつぶっている間に背中にシールが貼られる。→目を開けたあと、「言葉は使わないでグループを作ってください」とだけ指示あり。

⇒シールの色・形など…赤（単色丸形）、青（単色丸形、単色半円形）、黄色（単色丸形）、混合1（黄色×青）、混合2（青色×赤、黄色×赤）、白（長方形、丸形）、赤（半円形）の合計7つに分かれた。ただし赤（半円形）はグループではなく1名であった。



感想

2つ目のアクティビティで、どこのグループにも入ることができなかった赤（半円形）は私だったのだが、最終的にグループが出来上がった時に独りになってしまったときは、たまたま同じグループの人が見つけれなかったただけだと思っていた。しかし、自分の背中に貼られたシールの形と色を知った時、「その分け方なら自分も入れてもらえそうだな」と思えるようなグループがいくつかあることに気づき始め、少し悲しいような気になった。その一方で、腹立たしい気持ちは一切湧いてこなかった。

それは、グループを作るときに自分からは見ることのできない背中に貼られているシールを、他の参加者の方が確認しながら必死に探してくださっていたことをわかっているからである。グループに入れてもらえなかったというよりは、悪気がなく行動された結果だと受け止めることもできそうだと感じた。しかし、これを社会に置き換えて考えてみると非常に恐ろしいことである。背中に貼られたシールを自分の意思とは関係なく決められた事柄と置き換えてみるならどうだろうか。また、ただ「グループを作ってください」と言われたただけなのに、目新しい情報に飛びついてグループ分けを行ってしまったということは何を意味するのか。簡単なアイスブレイクの活動ではあったものの、人間の習性や社会的心理とも関わってくるような奥の深いワークだったと感じた。

ゲストによる母国紹介の概要

●ザカリヤさん「シリアの紹介」

- ・シリアは中東に位置
- ・首都はダマスカス
- ・13地区に分かれている
- ・ほとんど乾燥しており、夏は暑く、冬は寒い

- ・アラビア語は全国土で通じる
- ・野菜はキログラムで買う
- ・シャクリエ、シャワルマ串という料理が有名
- ・バラから作られたジャムもある
- ・石油精製、化学工業が盛ん
- ・ウマイヤドモスクやボスラなどは世界遺産
- ・ダマスク織やモザイク、バックギャモンなどの伝統工芸が有名
- ・ザカリアさんのふるさとにあるアレppo城も有名
- ・ウガリット文字は紀元前 1400 年頃に使われた

●スザンさん「シリアのお話」

- ・ダマスカスは一番古い(7000年前に見つかった)
- ・書き言葉はシリアから始まった
- ・売るもの、買うものもシリアから
- ・アレppoは白いまちと呼ばれる(白い石から建てられた家が多いから)
- ・イスラーム教の人たちが一番多い
- ・キリスト教の人たちもいる
- ・教育やサッカーでダイバーシティが見られる

●ラヤーンさん「スーダンの紹介」

- ・100 万平方マイルの国
- ・30 種類以上のマンゴーがある
- ・英国の植民地から 2011 年に独立
- ・南北間だけでなく南内部でも争いはある。日本で報道されることは戦争の事ばかりであるが、スーダンには魅力がいっぱいあることを知ってほしい
- ・白ナイルと青ナイルがエジプトを經由して流れている
- ・気候が多様性を持っていることから、農作物も気候に合わせて作られる
- ・有数の資源国
- ・食糧を提供することができる国トップ3にも入る
- ・16 世紀にイスラーム教が広まったことでアラビア語が公用語になった
- ・女性活躍の観点ではアフリカやアジア諸国の中で多くの分野で先駆的な立場
(最初的女性国会議員を輩出したのはスーダン)
- ・ピラミッドの数も多い(エジプトとは異なる古代文明を持つ)

●シュエさん「ミャンマーの紹介」

- ・ネーピードーが首都
- ・人口は日本より少なめ

- ・面積は少し大きい
- ・国内戦争が起きた(クーデターが起きて2年経つ)
→家族のビジネスが止まって収入が入らない(生活が苦しい)
デモに参加するとリスクがある
- ・男性は普段ジャケットを着ないが結婚式や卒業式などの大事な日には着る
- ・女性の民族衣装の色は決まっておらずデザインも選ぶことができる
- ・135 以上の民族が一緒に住んでいる(ビルマ民族 70%以上)
→他の民族の人でもビルマ語+自分たちの言語を話している
- ・国の宗教は仏教が 87% (息子を産んだら必ずお坊さんのところに行かせる習慣がある)
- ・おすすめの観光地はガバリ(エビやカニがおいしい)
- ・茶葉を使ったサラダや食後のお菓子がある(手作りすることが多い)
- ・ナンジットやモヒンガーという料理が有名

午後の部は、紛争問題を抱える国・地域出身者の方との交流を行った。今回は、シリア出身の方お二人、スーダン出身の方、そしてミャンマー出身の方お一人ずつの計4人の難民・避難民の問題を抱える国・地域出身の方たちからお話を伺った。形態としては、セミナー参加者が4つのグループに分かれて、ゲストの方1人ずつからお話をしてもらうという形。

ザカリアさん(シリア出身)

(大阪の専門学校生)



Q. ザカリアさんが日本に来たきっかけは？

A. 日本のアニメ(ナルト)がきっかけで日本に興

味を持った。今もアニメが好きで、最近人気の鬼滅の刃や呪術廻戦も見た。また、シリアでは、トルコのドラマが放送されており、様々な国の作品に接する機会があった。

Q. シリアの様子は？

A. 今シリアに残っているひとたちは、国の状況に慣れてきている。自分がやっていいこととやってはいけないことを理解していると仰っていたのが印象的だった。また、なぜシリアで内戦が起こっているのかを説明してくださったが、複雑であまり理解できなかった。分かったことは、アサドファミリーの独裁が続いていること、選挙は形式的で、ほとんど茶番のようなものだという事。

Q. どのような流れで日本に来たのか？

A. 2011 年からアレッポ大学の薬学部で勉強していた。政府軍と反政府軍の紛争が起こり、身の危険を感じたため 2016 年にシリアからトルコへ難民として避難した。そして 2018 年までトルコで働き、トルコに住んでいるシリア人から、一般財団法人パスウェイズ・ジャパンの奨学金制度があることを教えてもらい、日本に絶対に来なかったのを申請した。

Q. ご家族の状況は？

A. 私（ザカリアさん）と、兄はトルコに避難、弟はドイツへ、もう二人の兄弟と両親はシリアに留まった。今はそれぞれ別の国で暮らしていて、今は月に 1、2 回連絡を取っている。

Q. 日本とシリアの違いは？

A. シリア人は人同士の壁がなく、のんびりとした性格。仕事以外の時間はカフェに行ったりトランプをしている。日本人は動きすぎている感じがする。

Q. アルバイトしていて困ることは？

A. 人間関係

Q. シリアからトルコへ渡った時のことを、可能な範囲で教えてください。

A. 三回入国を試みた。二回捕まって三回目ようやく成功した。

一回目は3メートルほどの壁を登ろうとした。二回目の時は 100 人くらい見張りがあった。三回目の時は詳しい人（ブローカー）に案内してもらった。

Q. シリアの軍隊の制度について教えてください。

A. 現在は一年半、以前は 10 年間ほど絶対に入隊しないと行けなかった。

Q. これからの予定を教えてください。

A. 専門学校で薬の分析について学ぶ予定。

シュエさん（ミャンマー出身）

（県内大学の留学生）



Q. シュエさんが日本に来て感じたことは？

A. 日本人はとても優しい。ミャンマーから日本に来て分からないことばかりで、特にゴミの分別が難しかった。しかし、近所に住む日本人のおばちゃんにゴミの出し方を教えてもらえたおかげで日本に適應できた。また、日本に来て、24 時間電氣が使えることに驚いた。ミャンマーでは、停電で電氣が使えないこともよくある。

Q. ミャンマーの様子は？

A. ミャンマーではビジネスが止まっているため、ミャンマーで暮らす人達は、今までの貯金や富裕層からの寄付等を頼りに生活している。学校やスーパーも開いていない。学生は、オンライン授業等で勉強をする人もいるようだが、貧しい子達は勉強できていないのではないかと。また、食料を調達するのも、スーパーではなく市場のようなところで購入する。しかし、いつでも出歩けるというわけではなく、街に兵士がやってくることもあるので、あまり外に出かけない生活をしている。

ミャンマーの国民でも、軍部を支持する人もい

れば支持しない人もいる。軍部を支持する人は、軍部を支持することにより受けられるメリット（大学への裏口入学等）に魅力を感じているようだ。シュエさんは、日本政府が軍部を支持することに反対するデモにも積極的に参加している。

Q. 日本人の印象は？

A. いい人がたくさんいますが、みんな気遣いし過ぎのように思う。島国だからか？

Q. ミャンマー（ヤンゴン）でのごみ問題について教えてください。

A. 政府は他の問題が山積みで、ごみ問題については後回しなのが現状。

Q. ミャンマーを出たのはいつですか？

A. 2018年。留学生としてきた。ミャンマーの私立高に通っていたので日本とのつながりがあり留学した。

Q. 日本での生活費・学費は誰が払っていますか？

A. 親が学費を払っている。生活費は自分で働いて工面している。一時期ミャンマーでクーデターがあり払えなくなった。来年からは東京のIT会社に就職が決まっている。父は日本が好きで、良い印象を持っている。私と妹には自立してほしいと思っている。

Q. 困っていることはありますか？

A. 先生のストライキで学校が2年以上閉鎖されているので、ミャンマーにいる妹は教育が受けられず困っている。学校で授業が受けられないためミャンマーにいる友達はオンライン授業を受けたり、近隣の国（タイなど）に短期留学している。物価の高騰があり、スーパーは閉まっている。都会に人が集まるのを政府が嫌がっている。民族同士、民族と政府間の争いもある。宝石やパールが採れるから、争いが起こりやすい。

感想

ザカリアさんのお話では、シリアからトルコの国境を渡るのに三度も挑戦されていたことに驚きました。二度捕まり身の危険を冒しながらも、それでも

より安全で良い環境であろうトルコを目指された意志の強さに、生きることへの貪欲さを感じました。シュエさんからは子どもの権利である教育も受けられない状況が続いているという話を聞きました。この状況を何とかしたくても、デモなどをしたら捕まってしまうし、国民もなす術がなく、もどかしい思いをされていることを感じました。

日本で生活していると、世界の国々で起こっていることがどこか他人事のような、思いは馳せつつも自分たちの身にはそんなことは起きるわけがないと信じて疑わない人が圧倒的多数だと思います。まずはこのように話を聞いたり知る機会を持つことと、最後のふりかえりでもあったように、これらを自分事として捉え、自分には何ができるだろうと考え、一つでも何か行動していくことが大切であると感じました。

感想

お二人とも母国の大変な状況を包み隠さず話してくださったことに驚きました。日本に住む私にとっては、想像することも難しいお話でしたが、お二人にとっては、母国の大変な状況が現実であり、それが当たり前になりつつあるのかと感じるような話し振りでした。お話を聞きながら、日本人である私がどれだけ「平和ボケ」しているかを痛感しました。

また、驚いたのは、お二人とも母国について深く理解されている点です。私は日本でずっと暮らしているのにもかかわらず、留学生から日本について聞かれても上手く答えることができなかった経験があります。日本でずっと暮らしているため、日本が当たり前になり、日本の特徴は何か、他国と何が違うのかを全く理解できていませんでした。しかし、お二人は母国と日本との違いを理解し、私たちの質問にすぐに回答されている姿を見て、すごいな、私も日本について聞かれたとき、しっかり答えられる人になりたいなと感じました。

私は、大学で日本の技能実習制度や出入国管理体制を学ぶたびに、外国人は日本に来るより他国に行った方が幸せなのではないかという思いになっていました。しかし、今回のセミナーで、実際に外国人の方々とお会いして、日本で自分の夢を叶えるために一生懸命暮らしている様子を知り、また日本が好きだと話してくださったことで温かい気持ちになりました。

【シリア出身 スザンさん】

(オンライン参加 都内の大学院生で国際関係を学ぶ。)

今回はリモートという形だったが、出身国・地域についてだけではなく、その他たくさんのお話を聞くことが出来た。



交流内容は以下のとおり。

- シリアのアレッポ出身。歴史的な建物の古い町があったが、戦争によって壊されてしまった。
- アレッポ城など観光資源もあり、白い石が歴史的に有名。食べ物おいしい。ご飯を誘う文化があり、ぜひ行ってほしいとのこと。ダマスカスやトルコから電車で行ける。
- もともとはフランスから独立した。
- 国の現状としては、安全になりつつある。普通に生活できるが、電気は1日1時間だけ利用でき、薬や医療体制、教育は特に不足している。エンジニアの人が国外移動できないなどの制限がある。
- スザンさん自身はもともと子供のころからアニメ（特にジョジョ）が好きで、日本文化への興味があった。日本での生活はチャレンジで大変なこともあるが、夢のために政府のプログラムに参加を決めた。
- アメリカから反アサド政権のための制裁法があり、経済的に苦しくなり、インフレが起こった

〈出身国・地域、家族について〉

シリアで内戦が激化したのは2013年頃で、スザンさんが通っていた大学、そして家が攻撃され避難を迫られた。お父さんはその際に亡くなられたとおっしゃっていた。直行で来日したわけではなく、2014年からはトルコで難民生活を送っていた。そこで、知り合いから日本の留学プログラムについて

聞き、元々日本のアニメや文化に興味があったスザンさんはすぐに応募し、来日された。これは、留学生インタビュー（パスウェイズ・ジャパン）のサイトからの情報であるが、シリアでの避難の道のりは非常に過酷なものであり、通常であれば20分の道を15時間かけながらスナイパーの目を避け続け、何とか通り抜けることが出来たという。

〈日本での生活について〉

2018年4月に来日され、最初の2年間は日本語学校で日本語を学習していた。現在は、東京都内の大学院でSDGsや平和について学びながら、先に来日していた妹さんと一緒に住んでいる。他にもボランティア活動をされており、同じ境遇に立っているシリアの人たちを助けることもあるとおっしゃっていた。スザンさんが日本で驚いたことは、電車が定刻通りに動くということと、電車自体が通勤・通学、またちょっとした移動でも多く使われているということだ。シリアの人たちは旅行のときしか電車を利用せず、現在ではこの習慣に慣れたが、来日当初は戸惑っていたという。

〈今のスザンさんの思い〉

スザンさんが現在のシリアの状況、またそれに対する自分自身の心情についてお話しになっていて、特に強調されていたのが、もちろん今もシリアは大変な状況にあるのは変わらないけれど、いつでも帰りたい、戻りたいと思っている。思っていないときはない、ということであった。故郷のインターネットなどの状況も悪く、友達や親戚などとも連絡が取れていないというもあるが、それよりもスザンさんには強い思いがある。それは、シリアに戻って教育を行いたいということである。特に、あまり豊かではない女性への教育を進めていき、貧困地域で学校を建てて、学びの場をつくってあげたいというのが今の夢であるとおっしゃっていた。その思いは、今はもう亡くなられたお母さんからの「教育は大切、女性は強い。」という教えから受け継がれたものであり、現在でも強く望んでいることであるという。

【スーダン出身 ラヤーンさん】

（滋賀県内企業にお勤め）

ラヤーンさんとは直接交流を行い、出身国・地域についての質問をしながら、普段の生活や好きなものについてなど楽しみながらお話を伺うことが出来た。



○国名の由来はアラビア語で「黒い肌の人」という意味。

○30種類のマンゴーがあり、自然も豊か。

○イスラム文化だが、女性が強い歴史観で、女王がいたこともある。地域によっては男尊女卑の因習が残っている。

○大家族が主流で、ラヤーンさんの父母の時代は10人兄弟も当たり前だった。

○紛争地域は遠い所で起こっている感じだが、経済的な影響はあり、小競り合いが継続している。南スーダンが石油利権を争って独立した。スーダンでは金が採掘できる。

○クーデターにより30年間にわたって独裁政権が支配していたが、2019年軍事クーデターにより暫定政権がたてられた。しかし、2021年に再びクーデターが起こされ、軍政が続いている。長年の軍事勢力によるわいろ等の汚職が問題となっている。

○女性の政治参画が盛んで、憲法で3割程度の定員を保証している（クォータ制？）。

〈出身国・地域、家族について〉

4人兄弟のうちの一人であるラヤーンさん。他のご兄弟は、みんな別々の国で暮らしており、それぞれドバイ、イギリス、そしてスーダンに残っている方も一人おられる。小さい頃からかくれんぼやお絵かきなどで遊びながら、スーダンでの生活を送っ

ていた。ちなみに男の子はよくサッカーをして遊んでいたそうだ。しかし地域によっては、怪我や病気などで医療機関に行かなければならない状況になっても、治療を受けにくく、裕福な人たちだけが海外へ治療を受けに行くことができるということも少なくはなかった。

〈日本での生活について〉

2016年の9月に日本に来られたラヤーンさんは、奨学金制度を使用できるインターンシップに参加したのをきっかけに日本での生活を始めた。スーダンでは汲んできた水を使って排泄物を流していたため、来日当初はトイレのレバーをひねると水が流れること、便座が温かいこと、そして自動販売機の利便性に驚いたとおっしゃっていた。かつては、化学工学を専攻に大学に通っていて、現在では水処理関係のお仕事をされている。

〈今のラヤーンさんの思い〉

スーダンでは教育制度が十分に普及しておらず、教育の場がもっと増えてほしいという願いが大きいとおっしゃっていた。やはり教育は必要不可欠なものであり、ラヤーンさんご自身も勉強をすることが楽しいため、その思いを故郷で伝えたいという強い望みを持っておられた。

感想

はじめは、想像をはるかに超える残酷な紛争が、こんなにも美しい国々で起こってしまっているという状況に驚きを隠せなかったが、お二方から教育の大切さや女性の強さ、故郷の復興に対する強い思いを感じ取り、非常に感銘を受けた。紛争問題を抱える国・地域のほとんどの方たちは、まだまだ安心できる状況ではないが、例えば募金であったり、家族や友達に今回得た情報を提供したり、定期的に紛争問題を抱える国・地域の現状を確認したりなど、まずは実現可能な行動を優先的に取っていきたいと強く思った。

感想

皆さん、立場や状況も違い、捉え方等もさまざまであった。私たちは移民難民問題というと、どうしてもひとくくりにして考えがちだが、それぞれがい

ろいろな考えを持ち、それぞれの生活があって、一人の人間として生きていることを忘れてはいけないと思った。

日本での生活に苦労はあったかという質問にスザンさんが、「大変だけど、楽しいことばかりは楽しくないから」と非常に前向きな明るい答えをさせていた。その一方で、「アサド政権下には戻れない」という覚悟も述べられていて、スザンさんの強さと明るさにハッとさせられた。

ラヤーンさんとのお話では、政治への女性参画の話が気になった。教育の問題もそうだが、日本での問題にも通じる部分で参考になった。

午前中の講義を受けたあとに、午後の話をお聞きすると、ぼんやりと概念的に理解していた知識が具体的に身近なものとして感じられた。

最後に、稚拙な質問等にも真摯にご協力いただいた4名の参加者の方には感謝申し上げたい。

2. お二人の話を聞いて、グループ内で出た意見

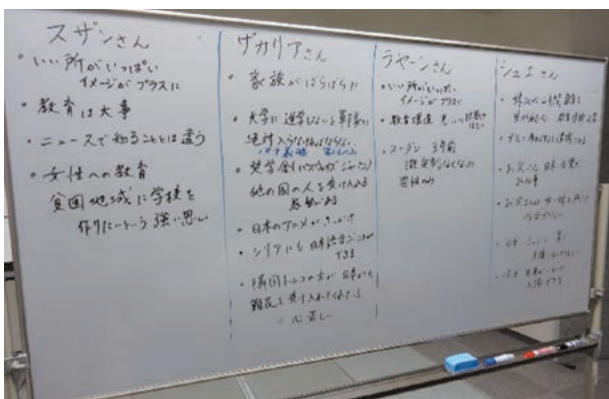
- ・お二人とも話を聞いていて母国のことを好きなことが非常に伝わってくる。お二人に共通していたのは教育への必要性を言われていた点だ。
- ・経済的な格差があると感じた。
- ・母国の魅力を教えてもらえた。想像していたものといい意味でイメージが違い、行きたいと興味をひかれた。紛争を抱え、経済的に苦しい状況を感じた。
- ・日本としてできることはないか考えたい。他人事にはできない。
- ・紛争国家と言われると、ボロボロのイメージを持ちがちだが、もちろん国として素晴らしい面もあることを改めて知った。簡単に行けないのが残念だ。
- ・移民政策、難民の問題を再考する機会になった。
- ・直にお二人から話を聞いたことで、ニュースで見ているイメージとガラッと変わった。



3. 他のグループからの意見

- ・(スザンさんとラヤーンさんから話を聞いたテーブル) いい所がいっぱい聞けて良かった。ニュースの状況とは違うことも感じた。教育の大切さを言われていて、特に女性への教育や学校を作りたいとおっしゃっていたことが印象的だった。
- ・(シュエさん) ミャンマーでは学校教育がストップし、権利が保障されていない状況。デモに参加すると逮捕失職するので、政府に従うしかない状況で、市民の声が反映されづらい。学校や警察の機能が停止しているので、簡単には家から出られない状況に言葉を失う。現体制を支持する人もいる状況だ。日本に望むことは軍を支援するのをやめてほしい、そして、この現状をもっと知ってほしい。
- ・(ザカリアさん) 家族がドイツやトルコに住んでいる。軍隊に入るのは絶対で、選択肢が少ない状況への驚きがあった。日本には奨学金制度(パスウェイズ・ジャパン)を利用してきた。
- ・日本に関心の持ったきっかけは、シュエさんは父親が日系企業に勤めていたからで、ザカリアさんはアニメだった。母国にいたときから日本語を学ばれていた。
- ・難民受け入れもトルコ等と比べると日本が消極的であることは否めない。
- ・各国の徴兵制はどうなっているか。
シリアは18歳になると軍隊に入る義務がある。男兄弟がいらないなど免除条件はある。大学生は、入隊を延期することも可能(卒業後に入隊する)。スーダンも徴兵制がある。病気等での免除がある。ミャンマーは昔希望制の兵役があった。

交流後のグループ発表 概要



● A グループ

交流したゲスト：スザンさん、ラヤーンさん

- ・プレゼン等を聞いてゲストの出身国のいいところがいっぱいあると感じた。

→今までに知らなかったことを恥ずかしい気持ちになった。

- ・出身国への強い思いが感じられ、すごいと思った。

● B グループ

交流したゲスト：シュエさん、ザカリヤさん

- ・シュエさんはご家族の仕事が自動車関係で日本との繋がりがあるとのこと。現在、ミャンマーでは簡単に家から出ることができないということや、警察や学校が止まっていて治安が悪いということ、政治の体制を経済的な関係で支持している国民もいることを聞いた。

- ・ザカリヤさんはアニメで日本に興味を持ったとのこと。←アニメは国境を超えるのだと感じた。大学や高校でも日本語を学ぶ機会があるということにも驚いた。

- ・日本がミャンマーの軍を支援するのはやめてほしいという意見、トルコ等の方が難民の受け入れがやさしいとの意見も聞いた。

● C グループ

交流したゲスト：ラヤーンさん、スザンさん

- ・出身国のいいところがいっぱいあることを知った。(例えば、スーダンにはたくさんフルーツがあることや、シリアには有名な建造物があることなど)

→ニュースで報じられる内容とはイメージがガラッと変わった。

- ・教育が大切だと感じた。(経済格差や経済制裁もあると知ったが、教育を受けることは大切だと思った)

● D グループ

交流したゲスト：ザカリヤさん、シュエさん

- ・3つ気になったことがあった。

①家族がドイツやトルコなどバラバラに住んでいるということ

②軍隊に入らないといけないという選択肢のない状態があること

(大学進学したら延期はできるが、いずれ軍隊には入らないといけない)

③奨学金制度で働きながら日本語を勉強できる

体制を作っているということ

- ・シュエさんから、教育を2年間受けることができている妹さんの話も聞いた。国としての取り組みが止まっているとのことだった。

- ・デモをするとクビになったり逮捕されたりするため、政府に従うしかない

→市民の声が反映されない

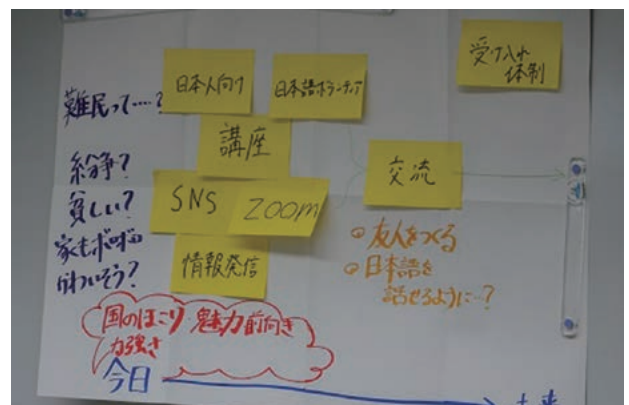
○補足○

- ・シリアでは、軍隊は家族の中で男性1人だったら行かなくてよい。

- ・スーダンも同じように軍隊のシステムがあったが、3年前になくなった。男性だけ高校卒業した段階で半年ほど入隊する。

- ・ミャンマーでは希望を出せば軍に入る。国としての法律はまだない。

参加者のふりかえり「自分たちにできること」まとめ



●1班・日本人の意識を変えることが大切

→例)・言葉の壁を取り除く・翻訳機を使ってコミュニケーション

- ・当事者意識が必要 難民や移民などとの出会いの場をつくる

- ・食事の面 ある大学では学生が声を上げ

たことでメニューにハラール料理が加わった。声を上げることは大切。

- ・ 助け合いの気持ちを持つ
- ・ 気にかける
- ・ 協会さんにセミナーの依頼をする
- ・ やさしい日本語の普及をする

● 2 班 ・ 今日のセミナーで受けた難民のイメージが今までと違った

- 相手の背景を聞く・知る
- ・ 清掃活動などの機会を利用して地域の外国の方を巻き込んで交流の場にする
- ・ 各年齢層の交流の場づくりも必要
- ・ 挨拶の勉強をする
- ・ 行政への働きかけをする

● 3 班 ・ 今回のセミナーに参加しなければ、イメージが変わることはなかった

- SNS や zoom でも交流する
- 最初は日本語支援に力を入れ、難民の受け入れ体制を作っていく
- ⇒ これらの過程で友人をつくったり、情報発信をしていく

● 4 班 ・ 募金活動をする

- ・ 今回のセミナーのように知る機会が大切
- 自分から学習しに行く

● 5 班 ・ 知ったことを伝えるようにする

- ・ ニュースを鵜呑みにしないで多角的に物事を知ろう、見ようとする
- ・ 外国籍の人たちの教育を恩恵に留めない（法律を考え直す）
- ・ 公立の学校でも教育が受けられるようにする。（給食やお祈りにも配慮）
- ・ 外国の方にもわかりやすいような医療システムをつくる
- ・ 地域で外国の方と交流できるようなイベントを企画する（ゴルフや BBQ など）

感想

難民について1日を通して学んだことで、難民の定義やどんな課題があるのか等を知ることができたとともに、ゲストの方との交流で紛争地域の状態や想いに触れることができた。紛争地域の出身であるゲストの方にお話を聞くことができる機会はとても貴重だと感じる一方で、紛争の話を深く聴くことま

ではなかなかできなかった。それは、こちらが質問をすることで心の傷を深めてしまわないだろうか、新たな傷を作ってしまうまいだろうかと思った結果だったと思う。グループでも交流前の時間にどこまで聞いてもよいのかと悩む声が多数挙がっていた。誰だって辛い記憶を言葉にするのは勇気のいることである。今回出身国の魅力とともに、その記憶を語ってくださったゲストの方々に感謝の気持ちでいっぱいになった。深くは聞くことはできなかったものの、今後難民問題を深めていくうえでの大事な視点はたくさん見つけられた。教育、経済、建物、食糧など一口に難民問題と言っても多くの要素が絡んでいると感じられた。さらに、午後の部の講師の方が仰っていたように、今回学んだことは難民問題の100分の1にもなっていないだろう。奥が深い問題だからこそ、知り続けようとする姿勢が大事になると思った。遠くの国で起きているようなことというような他人事として捉えるのではなく、自らが当事者意識を持つことから始めたい。



第4回 日本に根付く韓国朝鮮の歴史と今との出会い

午前は大津市にある滋賀朝鮮初級学校を訪問し、授業の見学および学校長からのお話を伺った。午後は、同市内にある渡来人歴史館を訪問し、専門員によるガイドツアーのあと、ふりかえりを行った。

実施日：2022年10月15日（土） 受講生：16名 サポーター：7名

会場：滋賀朝鮮初級学校、渡来人歴史館（大津市）

ファシリテーター： Glocal net Shiga 川辺 純子さん

午前の部

講師：滋賀朝鮮初級学校
校長 チョン サングン 鄭 想根さん



1) 滋賀朝鮮初級学校概要

創立62年の歴史があり、初級学校として園児～小学6年生まで、各学年2～4名程度の児童が在籍している。教育カリキュラムとしては、日本のカリキュラムに朝鮮のカリキュラムが加わったものであり、公立学校と比較して多い。月～土まで授業がある。

2) 見学

校内を自由に見学する時間をもらった。授業を公開していただき、実際の授業を参観させていただいた。その中で先生方が若いことに気づいた。理由を尋ねると、金銭的な面と忙しい職場環境が原因だと教えていただいた。また、教室掲示は日本の公立学校のように学級目標や学級通信、児童の成果物が見られた。



多くの参加者が教室を自由に入出入りする中でも、動じずに授業にのめりこむ姿や、元気よく挨拶をする児童の様子から、親近感を抱いた。

3) 朝鮮と滋賀県の歴史、関わり

戦争の影響を受け、朝鮮半島から滋賀県に強制連行された方がいた。

→県内で強制労働

例) 機関車、飛行機、炭鉱などのインフラ関係の仕事に従事

4) ヘイトスピーチ

日本のメディアではあまり報道されないが、国内でも朝鮮人に対するヘイト運動がある。実際の動画を視聴したが、同じ日本人として恥ずかしさを覚えた。また、ヘイト運動を起こす人には、教師を含めた有識者が多いと聞いて驚いた。ヘイト運動の様子は、インターネットで拡散され、海外からは強いバッシングがあった。

→そんな中でも、鄭校長をはじめ、ウリハッキョ（私たちの学校）を守るために多くの方が気持ちを一つにしてきた。ただ、日本の学校教育法では一条校に当てはまらない朝鮮学校は、授業料無償化、給食、コロナ禍における大学生への支援も乏しい現状があった。

☆一方で、朝鮮学校を支援する国内外の動きもある。鄭校長の思いに賛同し、県知事や政治家などが物的支援も行っている。また、鄭校長がウリハッキョ（私たちの学校）を守るためにクラウドファンディングも行っている。

5) 児童の進路

多くの生徒が、京都の朝鮮学校へ進路選択する傾

向にある。その後の進路としては、法律関係の仕事に就く生徒も多いようだ。その理由として、自分たちで日本と朝鮮の歴史的背景を知る上で、法律の是正などを考えるためと思われる。一方で、国内に点在する朝鮮学校を守るため、教員として朝鮮学校で働く生徒もいる。

6) 朝鮮学校へ子どもを通わせる選択をする保護者

日本の公立学校へ通うことに比べ、金銭面などで保護者の負担も増える朝鮮学校へなぜ通わせるのか、という疑問を抱いた。鄭校長は「わが子に朝鮮人としての誇りを持ってほしい」という保護者の願いが関係しているのではと回答いただいた。

感想

何より鄭校長の「伝える力」に魅了された時間だった。どういう思いで、ウリハッキョを守ってきたのか。その思いが強く伝わってきた。特に印象深いのが、「我々（朝鮮人）だけじゃもう限界があるんです。あなたたちは、我々を守る義務があります。ぜひ、相互理解をして共存していきましょう」という言葉です。本研修のテーマである多文化共生理解のためにも自分にできることを一つでもする使命感を感じる事ができました。まずは、「知る」そして「伝える」この繰り返しで多くの人に情報を提供したいと思いました。コロナ禍のなか、このような貴重な学びの機会を提供いただき本当に感謝です。準備、当日の運営までありがとうございました。

午後の部

渡来人歴史館

講師：渡来人歴史館 専門員 大澤 重人さん



【講演概要】

・ 渡来人についての歴史

帝国主義であった日本が朝鮮を植民地とした期間を日帝強占と言い、大日本帝国が朝鮮に対して強く出ていたことが伝わる文字でもある。1910年頃から日本に多くの朝鮮人が在住し、その多くが強制的に連れてこられた人であった一方、会社公募などから自主的に在住した人もいたと言う。講演中に高史明さんの『生きることの意味』という本の紹介があった。この本の中で朝鮮語しか話せない父親と日本語しか話せない子どもの掛け合いがあり、これについて参加者は強制的に日本教育を受けさせられた子どもに対してアイデンティティが失われた、人工的に家族間のコミュニケーションが取れない状況を作ってしまったという意見があった。終戦し日本国憲法へと時代が変化した中で、日本に在住している人を「日本人」と「外国人」という線引きをし、それぞれが抱える問題を同じ土台で考えられていないと大澤さんは指摘した。



参考 川辺さんから紹介され反響が大きかった動画
「DNAの旅」

<https://www.youtube.com/watch?v=gTMlnVx-PzQ>

感想

「今の私たちにできること」

今の私たちにできることは過去の過ちをただ謝ることではなく、同じことを繰り返さないことであると締めくくられた。今回の講義を通して線引きということについて考えた。偏見や思い込みから作られた枠組みや線引きにより、勝手に「日本人」「外国人」と認識し、憲法の面では在日であっても「外国人」は提供されない問題が多い。多文化を考えるうえで「外国人」は必然と関わる人であり線引きをしてはいけない対象であると考え、偏見や線引きをしないためには多くの人と関わる事が大切であると考えた。

第5回 ムスリム（イスラム教徒）との出会い

県内に暮らすインドネシア出身者が中心となり運営されているモスクを訪問。お祈りの様子の見学や、イスラム教について、モスクを作った経緯、日常生活について直接お話を伺う機会となった。

実施日：2022年11月13日（日） 受講生：18名 サポーター：6名

会 場：モスク アン ヌール 能登川（東近江市）

ファシリテーター Glocal net Shiga 川崎 功さん

ゲスト：一般社団法人滋賀インドネシア友好協会

代表理事 ムハマッド ヌズライさん

1) 在留インドネシア人について説明（川崎さん）

在留外国人統計によると、2021年12月現在、在留インドネシア人の総数は60,484人である。そのうち、技能実習生は28,896人。技能実習とは、単純作業では習得できない技術を、実習によって習得するための活動である。技能実習は本来、工場・牧場・農園などで3～5年働いた後、獲得した技術を本国で生かすことを目的としているが、日本の平均月収・年収がインドネシアよりもはるかに高いことから、彼らは日本で働き続け、母国の家族に仕送りをする生活が続ける傾向にある。技能実習生が日本に来るまでには、特に金銭面において大きな壁がある。その一つとしては、来日費用と来日前の研修費用で約30万円から50万円を支払わなくてはならないことだ。インドネシアの平均月収は3万円程であるため、技能実習生は借金をした状態で来日することになる。また、企業に就職できたとしても、企業が日本語を教えてくれるわけではない。よって、彼らは給料から日本語学校へ行くための月謝を支払わなくてはならない。さらに母国にいる家族への仕送りのためには自身の生活を切り詰めなくてはならないという現状がある。このような厳しい状況に置かれることになるとしても、彼らが出稼ぎ先に日本を選択するのは、日本はムスリムに対して寛容であり、治安も良く、泥棒が少ないという理由があるそうだ。

2) モスクについての解説（ヌズライさん）

モスクとはイスラム教の礼拝堂である。信仰の度合いにもよるが、イスラム教の信者であるムスリムと呼ばれる人達は、1日に5回の祈りを捧げることになっている。今回訪問したモスク アン ヌール

能登川は、職場での理解を得ることができず、職場で祈りの場所と時間を取ることが難しかった滋賀県に住んでいるムスリムたちが、祈りを捧げる場所をつくりたいという思いから、お金を出し合ってつくったものである。今の場所にモスクをつくったのは、事前に地域住民に説明して理解を得られたことや、駅が近く、通いやすいという理由からである。日によって来る人数は変動するが、一日に約15～30人、ラマダン（断食）明けには200人が来ることもあるそうだ。このモスクは、「モスクはみんなのもの」という考え方を持っている。よって、礼拝などにおいて女性は髪の毛を隠さなくてはならないなどの基本的なことさえ守れば、誰でも入ることができるそうだ。

3) イスラム教についての解説



イスラム教は唯一絶対の神であるアッラーを信仰し、神が最後の預言者であるムハンマドを通じて人々に下したとされるコーラン（クルアーン）の教えに従う一神教の宗教である。イスラム教徒になるには、五行一信仰告白、お祈り、断食、喜捨（寄付すること）、メッカへ行くことの5つを行わなくてはならないとされている。断食の目的は、日の昇っ

ている時間に食を断つことで、貧しい人々の苦しみを体感し、人の気持ちが分かるように訓練することである。お祈りの際は、手のひら、手から肘、顔、口、額あたりにある髪の毛、耳、足をそれぞれ三回、右から左の順番で水をかけて清潔にするというしきたりがある。その他の主なイスラム教のしきたりとしては、豚肉を食べないこと、女性は髪の毛をヒジャブで覆い、結婚相手や家族以外には見せてはいけないこと、亡くなった後は土葬をすることなどである。イスラム教は、コーランに書かれている教えをどれだけ守るかは信仰度合い次第であり、守れば守るほど徳を積むことになり、死後の世界で良い生活ができるという考え方を持っている。

4) インタビュー イスラム教徒の女性より

(1) コーランについて

イスラム教の聖典であるコーランは一人一つ持っているという。イスラム教徒の学校ではアラビア語を学ぶが、基本的にインドネシアの学校ではアラビア語を学ばない。そのため、学校外でコーランを読むためのアラビア語の勉強をしているそうだ。そのときに使うのが「イクロ」というテキストで、レベル1－6までであるため、簡単なレベルから子どもたちが学べるようになっている。

コーランは礼拝の後に読むことになっており、できるだけ毎日読むことがよいとされている。1日5回の礼拝のあと、読むことで「安心する」とお話しされていた。現代は、アプリが普及しているため、『Muslim Pro』というアプリで読んでいるそうだ。



(2) インドネシアから日本へ来て

留学生として日本にやってきた女性から、留学生の実情を伺った。留学のきっかけは、お父様が日本に在住されていたことがあり、日本に興味をもち、

日本語の勉強をしたことだそうだ。その方は、日本で生活するためにアルバイトをして生活している。しかし、イスラム教徒にとって重要なヒシャブの着用が認められないアルバイトもあり、アルバイト先を選ぶのに苦労されたそうだ。現在はヒシャブの着用が認められているホテルの清掃スタッフとしてアルバイトされている。多くの人が他宗教に対する理解をしなければ、こういった制限がなくなることはないのかもしれないと考えた。

食生活については、イスラム教徒が食べても良いとされるものを判別するためにアプリを使っているという。『HALAL JAPAN』というアプリを使って、バーコードを読み取り、食品の表示を確認するそうだ。しかし、本人が気づかずに口にした場合は大丈夫だそうだ。

(3) 性認知について

現代、世界ではLGBTQへの理解が進んでいる。しかし、コーランには同性愛は罪であると書かれており、男性か女性か、その他は認められない。神様から与えられた体であるため、生まれた時の性別で生きていくべきとされている。同性愛者の場合は、口外せずに隠して生きていくそうだ。攻撃の対象にもなるため、LGBTQへの理解が進む今、宗教とアイデンティティのどちらを尊重すべきか難しく思った。

(4) 断食について

30日間行う断食。女性からの話では、断食中に妊娠していれば、しなくてもよいことになっているという。また、病気を患っているときもしなくてもよい。ただ、断食ができる状態になれば、他の日にすることになっている。お話から、絶対にしなければならないという義務的な印象は受けず、個人の意思によって決定するという印象をもった。



感想

今回のセミナーは、近年ニュースで報道されているイスラム教・ムスリムの方々へのネガティブなイメージが一新される内容であったと確信している。その理由としては、ムスリムの方々と実際に会い、コミュニケーションを取り、食事を振る舞ってもらうことを通して、イスラム教の本来の教えを肌で体験できたからである。このような体験を日本人全員がすれば、ムスリムの方々への偏見は払しょくされ、差別も減っていくのではないかと思った。差別や偏見をなくすことは、結局は異文化を知ること・体験することに帰着すると感じた。そのうえで、やっぱり受け入れることは出来ないと感じる人がいるのなら、それはそれで一つの考え方であり、尊重されるべきであ

ると思う。加えて、全く異文化に興味がなく、知る気も体験する気も起きず受け入れられないという考え方も尊重されるべきであると思う。しかし、いかなる理由であれ、受け入れられないからといって異文化を持つ人々を攻撃の対象とすることは間違っているし、絶対にしてはいけないと強く思う。連続セミナーに参加している人たちは多文化に対して深い関心と理解があり、差別や偏見の目で見えていない人達がほとんどであるように思う。したがって、多文化への関心層である参加者が多文化に対する嫌悪感を表出し、攻撃をする層に対してどのようにアプローチしていくべきなのかを考え、アクションプランの立案・実行をすることで、日本を真の多文化共生社会にする夢は実現するのではないかと考える。

発表会

はじめに、多文化共生をテーマとした講演を聞き、その後、今回の連続セミナーでお世話になった方々などの前で受講生たちによるグループ発表会を行った。最後に、受講生に修了証を授与し、ふりかえりを行い、すべてのプログラムを修了した。

実施日：2022年12月17日（土） 受講生：17名 サポーター：3名

会 場：ピアザ淡海（大津市）

講義「これからの多文化共生を知る・考える」

講師 特定非営利活動法人 多文化共生リソースセンター東海

代表理事 土井 佳彦さん

1) 土井佳彦さん自身について



普段は名古屋で活動。幼少期に毎週土曜日の夜の番組（世界遺産を紹介する番組）を見て、世界にはすごいものがあるということに感動する。高校2年生の夏に、図書館で日本語教師という仕事を知る。大学で日本語教育について学び、母校の留学生に日

本語を教えることになる。当時、海外に行ったことはなかったけれど、国内にいただけで70か国以上の人に会った。

2008年のリーマンショックで世界的に景気が悪くなり、多くの外国人が職を失うという現実を見る。彼らは日本語がわからないから、仕事が探せない。日本語がわかっても採用の条件に「日本語の新聞が読めること」という記述があることに気づく。外国人ということを理由に採用しないのは法律に違反するが、必要な日本語の能力を条件とすることは認められている。日本語を覚えるだけでは不十分な現状があった。そこで、自分の中の意識が変わった。日本語を覚えてもその努力が報われない今の日本社会を変えていくと決意し、今に至っている。

2) 自分の町の事情を知ることが大事

リーマンショックのときには、国の帰国支援事業などを使うなどして、滋賀県でも全国で5番目に多い約1,500人の方が帰国された。この10年で約90万人の外国人が増えた一方、日本人は150万人減っているので人口減少という状況の中、世界中から多くの外国人が来てくださっているのはすごいこと。コロナ禍を経験したが、現状日本の歴史上一番多い約296万人の外国人が暮らしている。統計資料を見ながら、外国人の在留資格として永住者が最も多いこと、在住者が多いのは東京都などの大都市部であること、そして滋賀県在住の外国人の国籍などを確認した。海外に興味を持つだけでなく、自分の町の状況を把握しておく、海外の方と出会った時に話が盛り上がることもある。また、夕張メロンの生産現場ではコロナ禍で技能実習生の入国が途絶えたことにより、収穫ができず出荷できなかったという記事を見ながら、外国人が来ないと日本人が困る事例を紹介。外国人がいなければ日本が成り立たない状況になっていることを全体で確認した。

3) 国が動き始めた

10年前は出入国管理政策（どのような外国人を入れるか、帰ってもらうのか）はあったが、来た後のこと（誰が日本語を教えるのか、誰が病院の通訳をするか、子どもの教育はどうするか）を決めるのが多文化共生政策（社会統合政策）というが、日本にはないため誰も分からない状況だった。

しかし、4年前にようやく本格的に話が進んだ。国の「骨太の方針2018」で初めて、外国人にもっと来てもらうということが明記された。国は2つのことが大事だといっている。1つ目は「人権を守ること」、2つ目は「外国人が共生できる多文化共生社会の実現に取り組むこと」。多文化共生社会を考える中で特に大事なものは、「言葉の問題」である。これまでは民間団体や地方自治体に任されていた“相談センターの設置”や、“日本語教育の充実のための教室づくり”に国の予算が付きはじめ、これから進めていこうとしている。

4) 予算はついたが人材不足

相談センターの設置には法務省に20億円の予算が、日本語教育に関しては文化庁に予算が5億圓に

増額された。2019年に日本語教育推進に関する法律もでき、今後益々予算がつくことになっているが、重大な問題がある。日本語教師が不足していることである。統計資料を見ながら、滋賀県が全国で日本語教師不足ワースト1位であることを確認。理由としては、滋賀県には日本語教師養成の学校がないことが一因と紹介された。

5) 政治政策の中の多文化共生

2018年から5年間の計画を発表。NPO 移住連が実施した「移民政策に関する政党アンケート2022 参院選」では、技能実習制度の廃止と移民基本法の制定については各党の考えが前向きに変わってきた。自民党の「参院選2022 政策集」では多文化共生社会の実現を語るようになった。岸田首相が留学生の受入れを増やす計画策定を指示したが、それに伴い日本語教師を更に増やす必要も出てくる。多文化共生の取り組みは変わってきている。SNSなどでもニュースが流れているのでチェックしてもらいたい。

6) 大切なのは私たちの気持ち

日本は定住・永住可能な移民を積極的に受け入れるべきかどうかという質問に、今は半数ぐらいが賛成し、半数が反対している。2030年には419万人外国人に来てほしいところが、実際には356万人しかいない。2040年頃には、同僚の10人に1人が外国人という状況になっていく。令和5年には多文化共生に関して予算を更につけることにしている。日本語教育予算についても今年10億円、来年は17億円となる予定だが、ドイツでは600億円なので、まだまだではある。近畿圏での日本語教育推進の必要性について触れるとともに、日本語教師養成のための高等教育機関の予算取りについては、自ら手を挙げないと待っているだけでは予算はつかないと助言された。

7) 日本へ来る人が減る日が来る

SDGs や開発教育の取組をする中で、「グローバル Global」と「国際 international」の違いは、国際は国（national）と国との間の話。Globalは国の線（境）がなく、すべてがつながっているという意識を持ちましょうという考え方。そして、海外で

暮らす日本人も増えている。

一方で、ある調査によると今のままでは、2032年には他の国の賃金水準が上がり、日本へ働きに来る人はいなくなると予想されている。現在でも円安で日本へ働きに来る魅力が減っている。多文化共生を進めていくためには、“人が大事”。特に専門性を持つ人たちをつなげていく“コーディネーター”の役割が大事である。これから、ボランティアでおこなっていたことが仕事になっていく時代が来る。多文化共生は、外国人支援ではなく、人手不足の穴埋めだけでなく、地域づくりであるという認識を持つことが重要である。

Equality（平等）な社会ではなく、Equity（公正）な社会を目指していく。さらに、AかBという選択肢だけでなく、新たなCを考えるとよりよい社会が作れるという発想が必要になってくる。**New normal（新しい当たり前）**を作っていく、今までになかった社会を作っていくことが大事だろう。

質疑応答

Q. 国の施策などで多文化共生に関して多くの予算がつくようになったが、公金（税金）をどれほど外国人に割くのか、こういった面に支援していくべきと考えるのか聞かせてもらいたい。

A. どこにお金を使うか、個人的には3点ある。①子どもの教育。圧倒的に必要だと思っている。待てられない、子どもは数か月で大きく世界が変わるから。②災害対応。やってあげればよかったと思わなくてよいように、早くやってもらうべき。③日本語教育。まず、**外国人のために使うという発想を変えないといけない**。以前フランスに勉強に行った際、なぜこんなに予算がつくのかと尋ねたら、フランス語教育はフランス人のためにやっているという答えが返ってきた。目からうろこが落ちた。日本だって同じ。子どもの教育も外国人の子どもだけが就職できず、将来生活保護（税金）として払うぐらいであれば、社会を支える人材になるように、今ちゃんと教育したほうがよい。**これはコストではなく、これは投資なのだ、将来日本のプラスになるんだという考え方**ができるようになる必要がある。多文化共生とは、外国人を支援するためにお金をつけるのではなく、日本社会が外国人も日本人も一緒に暮らしやすい社会とな

り、日本に来たいという人が増えるためにお金を使うという発想にならないと、いつまでたっても日本人優先というふうになってしまうのではないかと思う。

感想

日本語教師という仕事についてもっと知りたいと感じました。最後の質問の中で、フランスではフランス語教育は外国人のためにやっているのではなく、フランス人のためにやっているという話がありました。お金の使い方の見方を変えると日本語教師の学校を作るというのは、先行投資になるのかもしれない。そして、多文化共生についての予算が増加してきたことについて優先されるべきは「外国人の子どもたちの教育」と仰っていたのが印象的でした。子どもは待てられない。一週間という時間は子どもたちにとっては非常に貴重である。そう考えると、今、勤務先となっている職場に感謝の気持ちさえ感じてしまう一日でした。

最後になりましたが、このような学びの場を整えていただきまして誠にありがとうございました。

グループ発表

グループ1:「地域理解促進のきっかけづくり」

発表者：村田、杉本、田中、楠居

目的：地域の方と地域の関わりが薄い外国籍の関わるの機会づくり。



組織で出来ること①：地域と関わる機会づくり

→当事者の方と話し合いの場などつながりを作り、互いの言葉や文化を知るきっかけにする。

組織で出来ること②：日本人と外国籍児童の交流の場をコーディネーターとして作る

例) サッカーなどのスポーツ交流、文化交流、合同練習、親善試合、校内ツアー、給食など

組織で出来ること③：日本語の学習支援

→東近江市…日本語初期指導教育を行っている。
各学校にボランティアを派遣する仕組みづくりなどを行う。

個人で出来ること①：情報力を高める

→情報分析：メディアによって切り取られた情報を正しく理解する。複数のメディアに触れる。

マイノリティに対する偏見を減らす。

情報収集：イベント情報の収集をしてイベントに積極的に参加する。

個人で出来ること②：地域活動への参画

個人で大切なこと＝主体的に関わること

行動(地域の情報紙にもアンテナを張る&発信する)、気づき(地域のことを知る)、波及効果(地域の外国人への情報提供、日本語指導の手伝いなど)

→自分たちが地域と外国人との「つなぎ」の役割が担えたらと考えている。

まとめ：「知る」ことで理解ある地域をつくる

グループ2:「他人事で終わらせない」

発表者：大森、内木、松村、周、永尾

目的：他人事としてではなく、自分事として捉えることが大切。そのためにまずは私たちマジョリティ側から歩み寄り、知ること。



○イベント開催を提案

①オンラインイベント開催の場合

- ・日本を知る：お参りの仕方や食事のマナーなど、当たり前のように詳しく知らないことを学ぶことで自国の理解を深め、紹介できる機会にする。
- ・外国を知る：外国の方への質問コーナーや、オンラインで現地と繋いで家などを見せてもらうことによって、文化や認識の違いを知る機会にする。
- ・ディスカッション&発表：知ったことや学んだことを参加者同士で共有してもらい、自分では気付かなかったことの発見や、自分たちに何ができるのかを考える機会を設ける。
- ・参加者同士の交流：イベント限りの交流で終わらせず、今後の活動にも生かせる機会にする。

② 対面開催の場合

- ・クイズ：日本や外国の文化などの違いや共通点について知る機会になる。
- ・交流：グループやペアを作って活動し、参加者同士が出身地関係なく話し合える機会にする。
- ・お悩み相談会：悩みの解決策を討論ブースで考えたり、許可をもらった人のお悩みはSNSなどで発信する。また、相談ブースも設け、日本の生活で困っていることを解決・知る機会にする。
- ・体験コーナー：「世界がもし100人の村だったら」のワークショップや、海外料理の試食や伝統工芸品の製作、お祈りの体験など、実際に体験して学べる機会とする。

○SNSでの情報発信

今回のセミナーをきっかけに、自分たちのグループで新しいInstagramを開設したので、フォローをお願いします。

Instagram: @shigirls_make_world_peaceful

グループ3:「地域でのアクションプラン -知ることをもっと身近に-」

発表者：西田、藤川、宮内、渡辺

目的：地域社会で多文化共生をどう作るか、多様性を受け入れられるようになること。



① イベントの実施

・ニュースポーツ

→体格・性別・年齢関係なく「誰でも」楽しむことが特徴。ルールがシンプルで、「ことば」がわからなくても一緒にできる。

② グルメを通じて知ってもらう

・料理教室

→共通の話題が多く、自然とコミュニケーションをとることができる

→自発的にもっと相手を知りたくなる

・お祭り（屋台やキッチンカー）への出店

*自分たちの地域に多文化の人たちがいることを認識してもらうことがねらい

→多文化に対する興味ありなしに関係なく多くの人の目に入る

まとめ：「交流の場→お互いを知る→仲が深まる」の循環→差別や偏見を減らすことにつながる
理解ができる＝知っている→知ってもらう
機会を作る

どのように学んだことをアウトプットすることで地域に還元できるかがこれからの課題

感想

組織や個人でできることなど、様々なアクションプランがありましたが、どのグループもおっしゃっていたのが「知る」ことの重要性でした。今までセミナーで学んだことをもとに行動を起こしていくことはもちろんですが、これからも学ぶ姿勢を忘れずに過ごしていきたいと思いました。貴重な機会・学

びを本当にありがとうございました。

グループ4:「学校の中の多様性」

テーマ1：学校給食と多様性

発表者：佐内



プレゼンテーション概要：

はじめに、日本の学校の中で、多様性を持つ児童生徒対象に、給食に関してどのような対応をしているのかの現状分析を紹介。そこでコピー弁当という弁当を持ってくるように学校が各家庭にお願いすることが多いという事実が分かった。コピー弁当というのは当日の学校給食献立表のメニューを見て、メニューと同様のものを詰めた弁当のこと。それは、給食のとき「一人だけ違う」と言われるのを避けたためだ。しかし、それは食習慣が違う、また異なる宗教を持つ子どもたちには難しいことだ。

そこで佐内さんが考えた具体的なアクションプランは、まず学校側が、誰でも食べられるような食材で作られた給食を用意すること。また、宗教という存在自体の理解と受容を深めていくこと。三つ目は、宗教教育の教材を作ることができないかを模索していきたいということだった。

テーマ2：国際理解教育

発表者：成田

プレゼンテーション概要：

成田さんは滋賀県内の高校に勤務していて、その環境を生かし、この一年でやってみたことを振り返った。まず、7月に栗東国際交流協会からの依頼で、教え子の高校生と一緒に栗東市紹介VTRの中国語バージョンを作成した。また、「世界がもし100人の村だったら」のワークショップを授業で実践された。このワークショップはとても好評だったそう。さらに、アフガニスタンで長く活動されたペシャワール会の中村哲さんの話や、前回参加した第

5回セミナーでのイスラム教徒の活動、アラビア語の話を生徒たちに教えたとのこと。これからやってみたいことも話された。例えば、教材「ブラジルボックス」の活用や生徒をミニティーチャーに育てていくことだ。

テーマ3：できそうなこと 発表者：濱野

プレゼンテーション概要：

濱野さんも滋賀県内の高校に勤務していて、自分ができる3つのことを発表された。まずは、授業や土曜講座でブラジル学校などを訪問すること。そして今回のセミナーで学んだことを授業にすること。三つ目は学校周辺各所と連携してPBLすること。「PBL」とは、「Project-based Learning」。何かしらの問題を解決することを通じて学びを深める手法だ。例として、在留外国人のために必要な防災施策に関連したテーマを設定し、生徒たちと一緒にモスクを訪問したり、ブラジル人学校の生徒とZoomで対話することで、実体験しながら学ぶというもの。

グループ5:「日本に根づく韓国朝鮮の歴史と今の出会い」

テーマ：多文化共生ってなんだろう？

発表者：甲本、竹辺、関口

プレゼンテーション概要：

セミナーで学んだことをまとめた。滋賀県と朝鮮の歴史を学び、朝鮮学校に直接訪問することにより、朝鮮学校の歴史も学んだ。そこで、朝鮮学校設立に込められた思いや学校を取り巻く現状も初めて知った。活動を通じて、歴史や背景など多様な視点を知ることができ、学ぶ責任が自分たちにはあると考えた。

アクションプランとしては、小学校で6年生を対象に「多文化共生ってなんだろう」という授業を実践した際のPPTを用いて紹介。多文化共生というきっかけ作りを目標に構成した授業だった。まず、アイデンティティとはどういう意味なのかの説明。そして、大津市にある滋賀朝鮮初級学校について児童たちに紹介した。朝鮮の歴史をふりかえりながら、在日朝鮮人の歴史も教えた。在日朝鮮人が朝鮮学校に通っている背景も児童たちに詳しく説明された。渡来人歴史館の大澤専門員が紹介された「君たちに戦争責任はない。でもそれを繰り返さない責任がある。」

という言葉を伝えたという。実践後の児童たちの感想を見ると、授業を通じて、知らなかったものを知り、みんな朝鮮初級学校へ関心を高めていた。

「知る」ことが大切で、今後グループのメンバーたちも教員としての立場で児童生徒たちに伝えられることを伝えていくとのことだった。

感想

グループ4と5には、教師という特殊な立場の人がメンバーにいたため、アクションプランを生み出すのではなく、直接実践する機会があった。また、生徒からのフィードバックにより、多様な考えやアイデアを生み出すためには、まず事実や背景を知ることが大事だということも再確認できた。今後、このセミナーで学んだことを私も少しでも広めていけるように頑張りたい。

受講生代表への修了証授与



さいごのふりかえり



連続セミナーを修了して 受講生の感想

- 大学卒業を前に、これからのことを不安に感じていたが、今回セミナーに多くの社会人の方たちも参加されていたので、自分自身も学び続けていきたいと思うことができた。
- 教員として、また海外経験もある立場として参加したが、他の参加者の発表をみて感心した一方で、社会に羽ばたこうとしている若者たちを社会がそうしたことを受け入れる動きになっているのかと恥ずかしい気持ちにもなった。明日から頑張って仕事したいと思う。
- 知ることが大事というのが、共通していた。自分たちが今回作った情報発信を続けていきたい。
- 大学内のコミュニティだけではなく、幅広い方たちと触れ合うことができ、新しい考え等に触れることができ勉強になった。来年から社会人になるが、今度は学ぶだけではなく伝えられるような社会人になりたい。
- はじめは就職活動のネタにならないかと思い参加したのだが、本当に参加して良かった。
- 外国人として唯一参加したが、滋賀県のみなさんが外国人のことを知りたいという意欲が伝わってきてうれしかった。
- 一日一日が濃密な時間で、みなさんからたくさんの刺激を受けた。当初、最後のアクションプランづくりに気負いするところがあったが、特別なことでなくてもよくて、次の世代へのバトンを渡していけるようなことでよいのだなと思った。
- 当初まったく何も知らなくて、自分は場違いなのかとも感じたが、いろんなところに訪問したり経験することができて、本当にためになるセミナーだった。
- 自分は社会人になってだいぶ経つが、この歳になってこうした場に新鮮な気持ちで参加でき、良かった。自分の仕事とも共通点があるので裏方の苦勞がわかるのだが、イベントを支える姿を見て、自分も頑張ろうと思った。
- まず、このセミナーが無料ということが驚きだった。日頃、教員として前に立って話す立場なのだが、自分が座って話を聞くのは新鮮で、かつ自分の授業を客観視することができた。ぜひ来年は、プレゼンした内容を現場で実践しようと思うので、高校生が発表する際にはみなさんにはオンラインでもよいのでコメンテーターとしての参加や、ワークショップのファシリテーターとして実践したいという要望があれば、いつでもコンタクトしてきてほしい。
- 普段授業をしていて思うのは、やらせてみないと身につかないということ。作ることで学んでいくことがとても良い。今回参加された学生さんたちは可能性の塊なので、どんどん実践していったほしい。手助けが必要であれば、いくらでも協力する。
- 今日の実践をしてみて、国算社理を教えるより、こうした授業をする方が自分自身も楽しく、意義深いと思い、それを確信した。このセミナーで学んだことを無駄にせず伝えていかなければならないと思う。このセミナーが続くよう、私自身も成長していきたい。
- 新しいことを知って、楽しいなと実感した。来年度から小学校教員になるが、子どもたちが身近にいることを生かして、自分の知ったことを伝えるだけでなく、子どもたちと一緒に学び続けたい。

グループ発表（各グループのスライド）

グループ1

2022年度 次世代人材育成事業



地域理解促進への きっかけづくり

グループ①

村田 亮 杉本 友恵

田中 里歩 楠居 里奈

地域理解促進へのきっかけづくり

1 セミナーを通じて学んだこと

(1) 印象に残ったエピソード

(2) セミナーを通して知った現状と課題

2 2つの視点でのアクションプラン

(1) 組織レベルで出来ること① 場作り

//② ラーチーノでの実践例

(2) 個人でできること① 「情報力」を高める

//② 地域活動への参画

3 まとめ



1 セミナーを通じて学んだこと

互いの言葉や文化を知る きっかけが必要では??



2 2つの視点でのアクションプラン

(1) 組織レベルで出来ること① 「地域と関わる機会作り」

組織の強味=つながり、場、人材、がすでにある

+連続講座で新たに繋がった人たちと協力し、課題解決

⇒課題意識について、当事者の方と話してみたい



2 2つの視点でのアクションプラン

(1) 組織レベルで出来ること①

- ・日本人と外国籍児童の交流の場づくり
- ・中間支援組織がコーディネート

具体的には...サッカー&文化交流(ラチーノ学院、滋賀学園高校)
合同練習、親善試合、校内ツアー、給食など



2 2つの視点でのアクションプラン

(1) 組織レベルで出来ること②

- ・日本語の学習支援

東近江市...日本語初期指導教室「いろは」
課題→送迎が困難
三か月後の対応

解決策→各学校にボランティアを派遣する仕組み作り
(現在市内二校で実践中)



2 2つの視点でのアクションプラン

(2) 個人でできること①

「情報力」を高める

「情報分析」:メディアによって切り取られた情報を正しく理解する
e.g. ニュースを疑う
複数のメディアを活用する

「情報収集」:市民団体によるイベントの情報を得る
e.g. Twitter, Facebook等のSNSの活用



2 2つの視点でのアクションプラン

(2) 個人でできること① 「情報力」を高める

「情報分析」→知識が増える
マイノリティに対する偏見を減らす
外国人と接するハードルを自ら下げる

「情報収集」→積極的にイベントに参加する



2 2つの視点でのアクションプラン

(2) 個人でできること②「地域活動への参画」

“個人の活動で重要なこと” = “主体的に関わること”

個人の「思い」や「考え」

- 他者の巻き込み
- 社会・地域の関心の高まり
- 組織的な活動への発展

「思い」や「考え」を行動に移すことが難しい

簡単にできる行動=地域活動



2 2つの視点でのアクションプラン

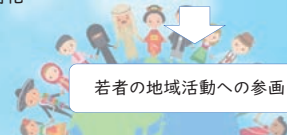
(2) 個人でできること②「地域活動への参画」

○地域活動の課題

- ・中心人物が高齢化
- ・個人の価値観の多様化・個別化

共に行動することが難しい

若者の地域活動への参画



2 2つの視点でのアクションプラン

(2) 個人でできること②「地域活動への参画」

○地域活動への参画

- (行 動)・地域の情報紙、回覧を見る
- ・公民館、清掃、子供会などの活動

(気 づ き)・地域の外国人を知る

外国人の居場所の創出
地域と外国人をつなぐ役割

- (波及効果)・地域の外国人の情報提供
- ・地域の外国人への情報提供
- ・日本語指導の手伝い



3 まとめ

「知る」ことで理解ある
地域をつくる



グループ2

他人事で終わらせない

グループ2

大森香凛、内木晴菜、松村のぞみ、
周 佳依、永尾陽菜多

マジョリティーの 自分たちから 歩み寄る大切さ

それを実現するために

イベント開催

Zoomの場合

外国について知る

日本を知る

ディスカッション
→発表

参加者同士の交流

日本を知る

- お参りの仕方知ってますか？
- おせちってなんで食べるの？
- マナーとは？
- お箸の正しい使い方



外国を知る

- 外国人への質問コーナー
外国についての豆知識を知る
質問例: インドの人は本当に毎日カレーを食べているのか
中国の皆さんはやはり人生の中で、一度パンダを見たことがあるのか？
アメリカでは銃が普通にスーパーで売られているのか
などなど
- 外国現地と繋いで家を見せてもらう
外国の玄関も招き猫が置いているのか
外国の猫でも にゃん が通じるのか



参加者同士の交流

- 連絡先を交換する時間を作る
- Lineなどのグループを作る
- いつでも追加できるように準備する

⇒今後繋げるように

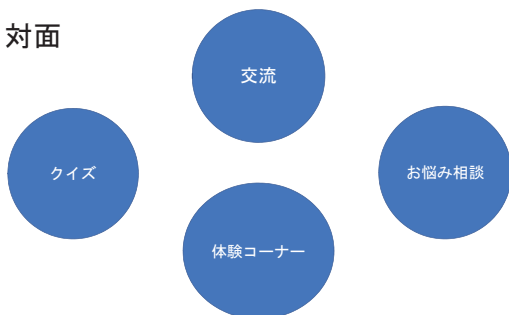


ディスカッション⇒

発表

- ブレイクアウトルームを作る
- 考え、気づきをみんなに共有一付箋で貼る
- 自分達に何ができるかを一緒に考える

対面



クイズ

- ・オンラインの「日本を知る」の対面バージョン
- ・外国の文化などについてのクイズ



交流

- ・アイスブレイキングから開始する。
例：2人ペアでインタビュービンゴをし、出身地の国旗を集める
- 例：グループを作り、運営側が考えた質問リストについて話し合ってもらう

⇒参加者同士が出身地関係なく話し合う機会を提供することができる！



お悩み相談

- ・悩みを書くことができる紙(匿名可)を用意しておき、入れてもらう箱を設置する
- ・投函された悩みは、その解決策をみんなで考えられるように、体験コーナーにつくる**討論ブース**での話題にしてもらう(みんなが生きやすい世界にするには?)
- ・許可をもらった人のお悩みはSNSなどで発信する
- ・日本の暮らしについて相談できるブースを設置する



体験コーナー

- ・『世界がもし100人の村だったら』
- ・海外の料理を食べてもらおう
- ・伝統工芸品を作ってみよう
- ・宗教についてしろう
- ・討論ブースで、日本に暮らす外国の方の悩みの解決策を考えてみよう
- ・「みんぱっく」を活用して、異文化に触れよう

- ・「みんぱっく」を活用して、異文化に触れよう

★「みんぱっく」とは、『世界各国、地域の民族衣装や生活の道具などと、それらにまつわる情報や解説がバックされています』(国立民族学博物館HPより引用)

実際に使われているモノに触れることで、より異文化を身近に感じてもらおう！



SNSの利用

- ・Instagram
- ・@shigirls_make_world_peaceful



課題

- ・場所
- ・資金
- ・人
- ・宣伝
- ・言語

ご協力をお願いします



グループ 3

地域での アクションプラン

～知ることをもっと身近に～

グループ 3 メンバー

西田 美和
藤川 真依
宮内 那緒
渡辺 華水



今日の流れ

1. テーマ
2. セミナーを通じて感じたこと
3. アクションプラン

テーマ

知ることをもっと身近に！

背景

- ・地域社会と多文化共生の必要性
- ・なぜ知ることなのか



セミナーを通じて感じたこと

- ① ブラジル人学校日本ラチーノ学園・滋賀朝鮮初級学校訪問

以前の認識（敷居が高い）

実際の交流を経て

→ **積極的な交流の実施**

- ② イスラム教のモスク訪問

自分の偏見（排他的、メディアのイメージ）

実際の交流を経て

→ **柔軟で多様な宗教**



アクションプラン 1

- ・イベントの実施

ニュースポーツ

体格差、性別、年齢関係なく「誰でも」

ルールがシンプル

「ことば」が分からなくても一緒に楽しめる

ex: グラウンドゴルフ

ルール：ホールポストにボールが入るまでの打数を数えて、
その打数が少ない方が勝ち



アクションプラン 2



"グルメ"を通じて知ってもらおう！

- ・料理教室

→ 共通の話題が多く、自然とコミュニケーションをとることができる

- ・お祭り（屋台やキッチンカー）

→ 多文化に対する興味ありなしに関係なく多くの人の目に入る



仲が深まる

交流の場

お互いを知る

展望

理解ができる＝知っている

今後、どのように地域に還元ができるのか

→ 地域の活性化

→ コミュニケーションの拡大

☆ 知ってもらう機会を作りたい！



グループ 4

学校の中の多様性

教育 グループ4 成田実幸 濱野優貴 佐内愛佳

テーマ設定 の理由

人材育成プログラムの中
で、様々な文化背景を持
つ方と出会った

その多様性を学校の中
で尊重するには何ができ
るかを考えたいと思った

学校給食と多様性

佐内

小学校では給食であることがほとんど

(ムスリムの方との交流で)
お弁当を持っていくようにしている



マイノリティの人の文化が尊重されていない

⇒どうすればよいのか？

現状分析

コピー弁当：給食のメニュー表を見て、その日の給食と同様のものを弁当で作って持ってきてもらうようにする

○同じような食材のものを食べるので、違いが見えにくい。

△保護者の負担が大きい（肉体的にも精神的にも）

・外国にルーツのある子どもたちの中で、学校給食に配慮が必要な人数が不明瞭（把握できていない）

・一口に「〇〇教」と言っても、その信仰の程度は個人によって様々→ひとくくりにはできないため、個別対応は必須

山ノ内 裕子, 四方 利明 (2021.3.31) 食マイノリティと多様性：学校給食における食物アレルギーおよび宗教対応をめぐって
file:///C:/Users/MNK/Downloads/KU-0700-20210331-03.pdf

学校給食で個別対応するときの問題点

「みんなと違う」ことが浮き彫りになる(悪いことではないのに)

宗教上の理由と好き嫌いの違いが混同される可能性がある

誤った宗教認識が広がる可能性(例：〇〇が食べられないのはかわいそう)

→宗教に関する理解は不可欠
具体的には何が出来るか？を考えていきたい

解決に向けた具体的なアクションプラン

・どの子どもも食べられるような食材でできた給食の用意
(月に1回は必ず)

・宗教という存在自体の理解・受容を深めていく
(例) 信仰上の理由で食べられない食事がある子どもに対して…
周りの子どもの理解が「好き嫌いそうしている」「〇〇君だけずるい」といった認識を持っているとき、「好き嫌いとは違う」ということを根気よく伝える。

・日本では、宗教教育は禁止されているが、ある程度の知識を持っておくことは重要なのではないか。(学校とは別に、地域で宗教に関する理解につながるイベントがあるとよいのでは)
⇒教材を作ることができないか検索していきたい。

成田

12月17日発表用

国際理解教育

この一年でやってみたこと…

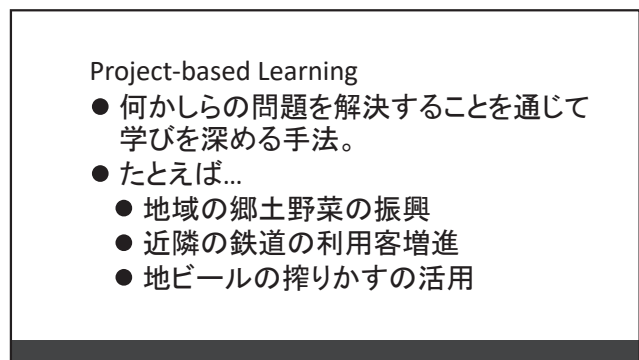
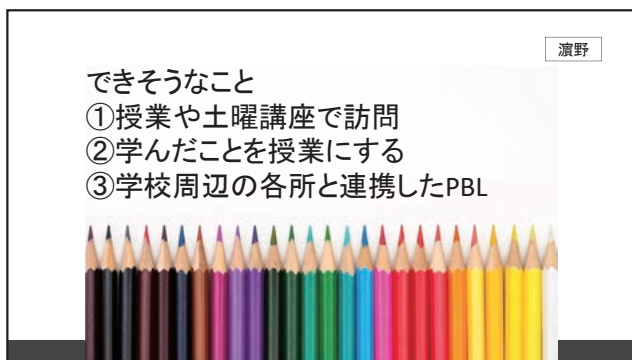
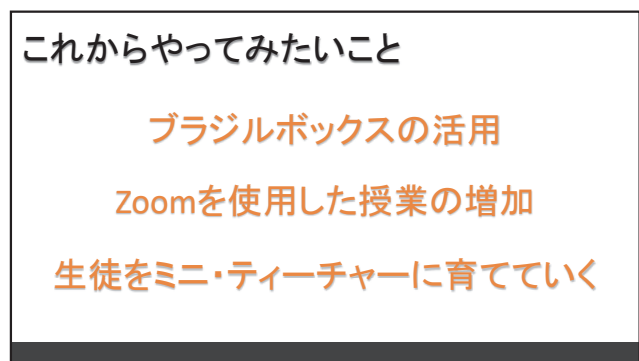
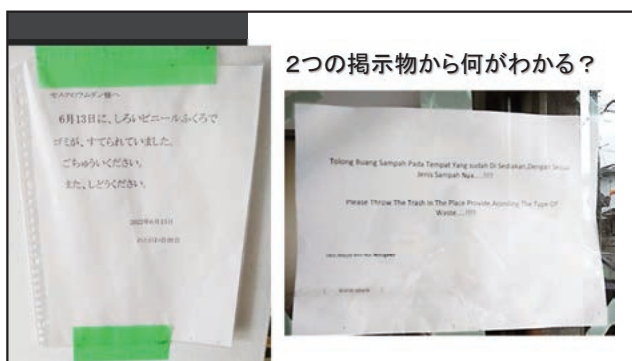
滋賀県内でできることの探索

滋賀県国際協会

次世代育成
連続セミナー

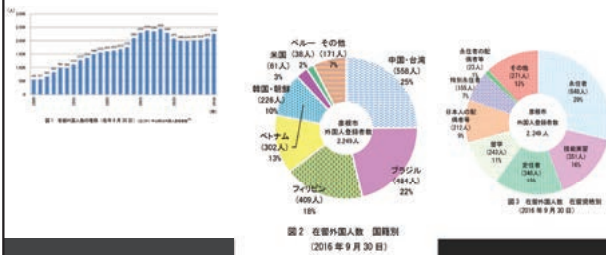
ミシガン

姉妹都市
衡陽市



Project-based Learning

● 彦根市の在留外国人



Project-based Learning

● たとえば...

テーマ:在留外国人のために必要な防災施策
想定されるアイデア:

- 外国語の避難誘導の案内動画
 - 外国語対応のハザードマップのアプリ
- など

Project-based Learning

● たとえば...

テーマ:在留外国人のために必要な防災施策
関連して...

- ブラジル人学校の生徒とzoomで対話
- ムスリムの生活を知る(モスク訪問)

など

構築主義 — 作ることで学ぶ

「学びとは、つくることだ。

人はつくるなかで学ぶ。

Learning Is Construction,
Learning Through Construction.]

シーモア・パパート



グループ 5

日本に根付く韓国朝鮮の歴史と今との出会い



グループ 5
甲本将希 竹辺このみ 関口皆実

滋賀県と朝鮮の歴史

- ・ 大津宮に逃れた百済からの渡来人
⇒文化が伝来する
- ・ 朝鮮人街道(彦根ー野洲)
⇒朝鮮通信使が江戸に行くまでに通った道
- ・ 雨森芳洲「誠心交隣」

古くからのつながり



朝鮮学校の概要

- 1946年 自主学校を創設
- 1960年 滋賀朝鮮中級学校創設
- 1963年 滋賀朝鮮初中級学校に

創立 62 周年



ウリハッキョ=わたしたちの学校

朝鮮学校に対する人々の想い

朝鮮学校設立に込められた想い

自分のルーツを
肯定的に学ぶ場

アイデンティティを守り、
堂々と生きてほしい

朝鮮学校に子どもを通学させる保護者の想い

朝鮮学校を取り巻く現状

- ☆クラウドファンディングによって集まる支援
- ☆ウリハッキョマダン

地域とのつながり

一方で・・・
ヘイトスピーチ、学校への攻撃、制度的差別

活動を通して学んだこと、考えたこと

歴史や背景を多様な視点から
知る必要がある。

自分のルーツを大切に。
相手のルーツを尊重する。

知る・学ぶ責任

知ったこと、学んだことを広げて
偏見をなくしていきたい。

アクションプランへ・・・

多文化共生ってなんだろう？

小学6年生への授業実践事例

アイデンティティーとは・・・

「自分らしさ」
「自分の個性」
「自分は自分である」
ということを認識していること。

とある学校の行事

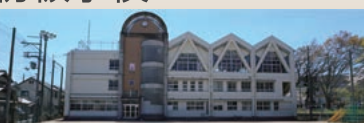
- やまのこ
- ホールの子
- うみのこ
- プール
- 運動会
- 平和学習
- おいもほり
- おもちつき
- マラソン大会
- スキー教室
- 学芸会

他にも・・・

- おやじ給食 月1回
→実は給食がありません
- おばあちゃん給食
- キャンプ
- 平和学習（広島）
→在日朝鮮人の人から話を聞く
- 教科書は自前

滋賀県大津市にある 滋賀朝鮮初級学校

社会の授業を参観しました



みんなの同い年！！

ちょっと歴史の学習タイム

700年ごろ 中大兄皇子が近江へ京を移す
→渡来人もたくさん近江（滋賀）へ

1800年ごろ 徳川家康の時代は対等な関係

1910年～1945年 朝鮮が日本の植民地に

その間・・・

1939年～1945年 朝鮮半島の70万人の人々を

日本に強制連行し、働かせる

※滋賀県には700人の朝鮮人が連れてこられた

日帝独占期

植民統治下の在日朝鮮人数の変化	
1910年	790人
↓	
1945年	236000人

「朝鮮人」は「日本人」になったはずが・・・

- 国籍は日本 戸籍は朝鮮
- 憲法は適用されない
- 朝鮮在住者には参政権もない



1930年ごろの日本の領土

なのに！

内面まで日本人に・・・

日の丸を掲げさせる・君が代を歌う
名前を日本人風に変える
朝鮮語の使用は禁止！

戦争が激化し、兵隊が足りず、戦場へ・・・

1945年8月15日

日本

朝鮮

敗戦

解放



朝鮮を南北にわけたのは、どこの国だろう？



膳所小学校

在日朝鮮人はどんな思いで、お金をかけて像を製作し、日本に残したのだろうか？



- 彦根市立城東小学校
- 「平和の誓い」像



なぜ、朝鮮初級学校に通っているのだろうか？

「昔の戦争でいつまで謝罪しなければ
ならないの」

君たちに戦争責任はない。
でもそれを繰り返さない責任がある。

③ 学習の感想（初めて知ったこと・考えたこと・これからのことなど）

戦争のときに朝鮮人の人たちがきて、戦争が終わり
行く場所がなく困ってる人がいるのを知って
罪悪感と責任感があった。
学校に朝鮮人などがいて、差別やいじめをせずに、
みんなで支え合い、平和に接したいです。

授業実践から

- 中学年なら・・・
- 朝鮮学校の写真を見せて、日本の学校との違いや似ているところを考える
- 高学年なら・・・
- 歴史にもふれながら、より深い思考へ
- わたしたちにできることはなにか、いつか行動にうつしたいと思えるような学び

まずは「知る」

そして、私たちの立場で
伝えられることを伝えていく

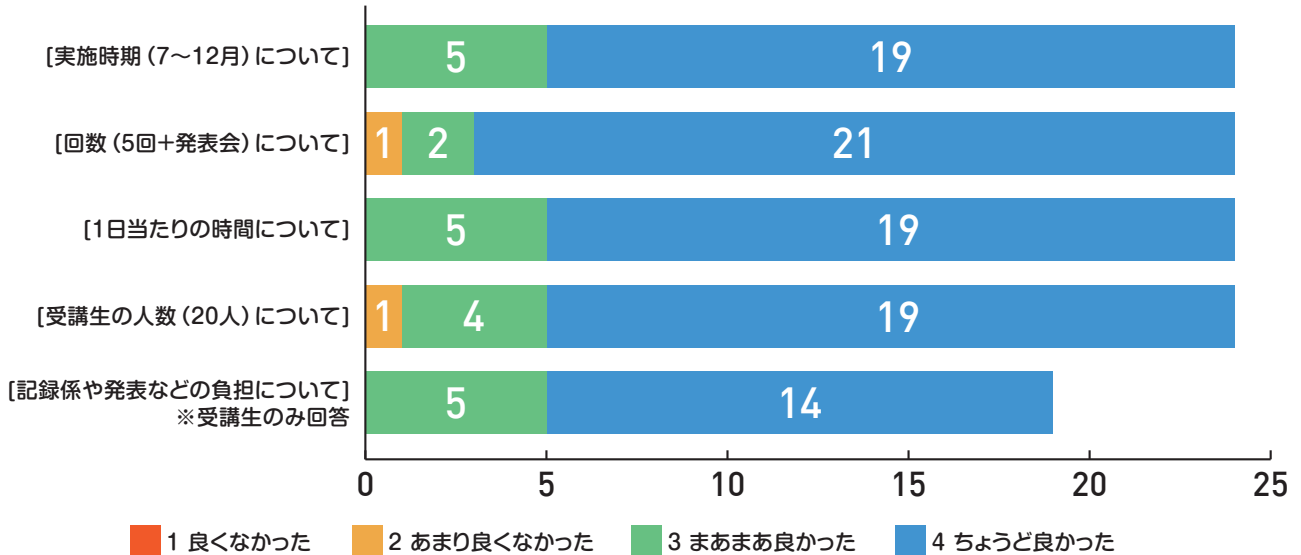
アンケートまとめ

2022 年度次世代人材育成事業「多文化共生×SDGs×開発教育」 参加者アンケート結果

回答数： 24 人（受講生 19 人、サポーター 5 人）

セミナー全体の感想

セミナー全体の感想 集計結果

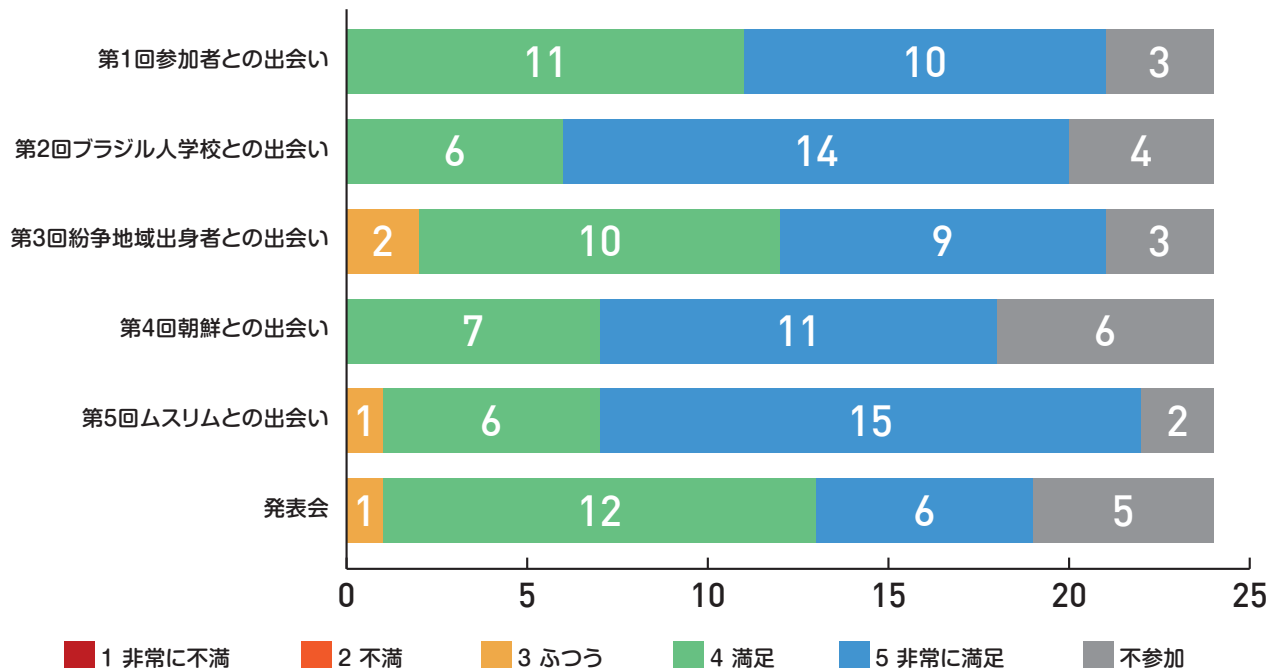


コメント

- ・受講生の人数について 参加できる人数は多いといいなと思いました。10名プラスして30名ほどの今回の規模がちょうどよいのかと。出欠の管理が大変そうですが…

各セミナーの満足度は？

各セミナーの満足度 集計結果



一番印象に残っている回は、どの回ですか？その理由は？（複数回答）

第2回 ブラジル人学校との出会い	7	・同じ市内にありながら行ったことがなく、日本人との交流もほとんどないという点に驚きました。生徒さんたちが親切で、もっと交流事業ができれば互いの多文化理解につながると感じました。 ・普段訪れる機会がない場所であったこと。馴染みのない言語での交流を通して、外国の方々が日本に来て感じる言葉の壁を身を持って体験することができたから。 ・貿易ゲームを初めて経験したので、何をしたらいいかわからないという状況に陥りました。学生さんとジェスチャーや英語でやりとりをして、理解していく過程がこれまでに体験したことのない気持ちだったので印象に残っています。 ・日本に住んでいるのに、日本人と話したことがほとんどないという話がショッキングでよく印象に残っています。 ・同じ滋賀県にもこのような学校が存在していることを知れ、生徒たちと交流が出来たことが印象的でした。 ・小さいグループでゲームをやっていたので、新しい友達ができました。
第3回 紛争地域出身者との出会い	3	・難民のイメージが変わったから。一人ひとりの別の人に出会い、実際関わることによって、自分の知識の浅さを知り、もう少しその人自身や、その人の国、背景について理解したいと思うようになる。 ・テレビや新聞を通じて色々と見たり読んだりしていても、当事者の方が目の前にいらっしやると初めて「他人事ではない」、「思っているより近い」と気づかされます。 ・普段聞いてもいいのかな、と躊躇するような質問（宗教について、日ごろの思いなど）を協力いただいた当事者が快く回答してくださり、理解が深まるととてもいい機会になりました。
第4回 朝鮮との出会い	4	・校長先生の伝える力に圧倒されたから。 ・最も視野を広げられました。
第5回 ムスリムとの出会い	11	・あたたかく迎えてくださって、祈りの体験や食事の体験をさせてくださったり、お話を伺う機会があったりして、とても充実した時間を過ごすことが出来たからです。 ・異文化がそのまま滋賀県にあると感じたので。 ・日本ではあまり接点がないため。

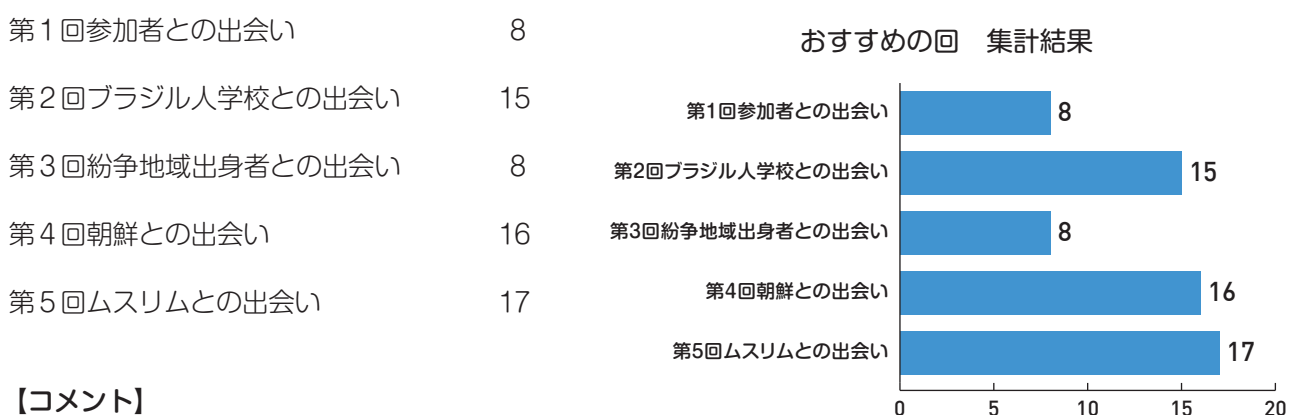
第5回ムスリムとの
出会い

- ・普段絶対お話を伺うことのできない人と濃いお話ができて、礼拝や料理まで一緒に体験させていただいて、とても印象に残った1日でした。
- ・ムスリムの方とは普段出会う機会がなく、お祈りや生活の実態など日本語で詳しく教えてくださったから。振舞っていただいたお料理もどれも食べたことがないものばかりでありながら、すごく美味しくて1日を通して貴重な体験ができたから。
- ・ムスリムの方の話がとても新鮮だったから。
- ・宗教に関心を持っていて、知らない面を知れて、ムスリムの印象が大きく変わった。
- ・ムスリムの方との交流会が最も印象に残った。今まで私が思っていた、勝手に想像していた印象と違いすぎていたから。
- ・大学では、朝鮮や移民・難民、日系ブラジル人については学び、またフィールドワークを行ったことがありましたが、イスラム教、ムスリムについて学ぶのは初めてでした。それもあり、とても印象に残っています。
- ・（イスラム教徒の）お母さんたちの話を直接聞いて、何に困ってるとかリアルな声を聞けたから！

その他の意見

- 1
- ・すべての回 どの回もいろんな方との出会いがあり、楽しかったです。
 - ・色々な現場に行かせてもらえたのは貴重な経験で楽しかったです。特にラチーノ学園と朝鮮学校の回が色々と考えさせられました。

もし来年も同様のセミナーを開催するとしたら、次年度の参加者にどの回をおすすめしますか？（複数回答）



【コメント】

- ・2回4回5回が実施されるならば、皆に勧めていきたいです。
- ・教員目線で考えるとブラジル人、朝鮮学校、ムスリム訪問など直接触れ合う機会が多いのをおすすめします！（参加者の参加目的によるかと）
- ・ラチーノ学院、モスクの訪問は在住外国人の方に対する価値観が大きく変わったのでおすすめしたいです。
- ・第4回。自分事のできる。

- ・全ての回をお勧めしたいです。特に、外国の方との交流があった回です。直接話すことができるからこそ、親近感を持って多文化共生について考えることができたと思います。
- ・全てです。
- ・特に屋外学習は印象として強く残っています。その中でも、第2回と第5回は、直接その文化を持っている方とお話しする機会を設けて下さったため、たくさん未知のことを知ることができました。
- ・第5回のムスリムの方との出会いはおすすめです。お祈りの時間も間近で見学させていただいたのが印象に残っています。
- ・第2回と第4回。内容は同様のものをおすすめします。
- ・全部出たほうが良いとおすすめします。朝鮮学校～滋賀と朝鮮とのつながりは知るべきことだと思います。
- ・初回とムスリムとの出会いの回は絶対あった方がよいと思う
- ・韓国、朝鮮の回です。私も含め日本人は、在日コリアンについての知識が少なすぎると感じています。なぜ在日コリアンが、日本で暮らしているのか、植民地主義との関わりから理解するべきだと思います。友達と、大学で何を学んでるのかという話をするとき、在日コリアンについて学んでるよといっても、ピンときてない友達が多いように思います。もっと、理解が広まればよいなと思っています。
- ・世界がもし100人の村だったらとモスクへ行くこと
- ・全部おすすめなので、特にこれが一番というのはない。全部面白い。
- ・すべての回に意味があったと思います。スケジュールの流れも良くて、一連の体験を来年もしてもらえるとよいと思います。

新しい訪問先、交流相手、取り上げるべきテーマなど、おすすめがあれば教えてください。

- ・県内の外国籍の方のコミュニティには引き続き訪問したいです。資料館などよりも、生の外国籍の方と交流することで本セミナーでの学びが深いものになると思いました。公立学校でなかなか難しいとは思いますが、湖南市の日枝中学校などにも訪問できると嬉しいです（教員目線）
- ・実際の活動に結びつけるならば、地域で活動実践がある方の話を最後の方に入れるとよい。
- ・介護問題。外国人が実際に働いておられる会社訪問。
- ・実際に工業団地などで働いておられる外国の方との交流をすると、よりリアルな日本に滞在する外国人の状況を知ることができると思います。
- ・外国にルーツを持つ子どもたちの居場所づくりをされている方の話を聞く。
- ・土井さんの講演で学んだのですが、全国の中で最も日本語教師が不足しているのは滋賀県で驚きました。今年度は外国人への理解を深めるテーマが多いように感じましたが、滋賀県の日本語教育の実情や、技能実習生の実情についても触れる機会があればより、滋賀に根付くつながりができるように思いました。
- ・ヘイトスピーチについてもう少し知りたいと思いました。どういう背景があるのか、原因、これをなくすためになにかできないか。

・寺子屋 日和（学習支援教室）

・草津にベトナム人青年会？みたいなのがあったらボランティア団体の方が言っていたので、ベトナムの方も増えているので出会うのも面白いのかな…？と思うがその団体についてほとんど知識がないため、また聞いてきます。

（以下、サポーターより）

・在日外国人が直面する様々な問題について：職場でのトラブル、経済状況、日本社会における立場、日本の学校で教育を受ける際の課題、外国人学校の経営問題などをまとめて紹介するのはどうでしょうか？

・ベトナム人のコミュニティ、来日したばかりの人の生活・苦労

・私が元々ボランティア活動していた、海外にルーツを持つ子供達への学習支援団体の寺子屋日和があることを、どこかのタイミングで皆さんに知っていただけると有難いと思いました。10年以上前から日和で活動なさっていて、現在京都大学総合人間学部の准教授である徳永悠さんと繋がりががありますので、必要でしたらご紹介が可能かと思います。

・地域の日本語教室、子ども食堂、日本人と外国人が交流できる場を提供している団体の思いや経験を聴いたら面白いと思います。協会で実施されている高校生向けガイダンスや事業の見学なども学びになると思います。

次年度のセミナーを企画する上で、改善・改良すべき点があれば教えてください。

・セミナーの開催日を増やしてもらえると嬉しいです。大変学びの多いセミナーだったため。

・タイムキーパー等を担う人を決めて、各グループの発表時間を守って発表ができればよいと思います。せっかくの集大成の回なので、来賓の方や土井先生の講評も詳しく聞きたかったです。

・グループ発表を行うなら、当初から設定しておく方がよい。発表時間がとれない場合は、各自がグループ内で発表すると、時間短縮になる。

・特にありません。素晴らしいセミナーをありがとうございました。

・特にないです。どの回も本当に楽しかったです！

・もし次年度もグループ発表をされるなら、グループによっては各自で調整するのが難しい場合があるので、セミナーの時間内で話し合いの時間がもう少し確保されると良いと思いました。あるいは、セミナーの最終回を丸々グループ発表に向けた準備兼ふりかえりにするのもいいのかもしれません。

・非常に価値のあるセミナーを企画してくださりありがとうございました。

・特にない。

・もっと直接お話を聞ける時間を長くしてほしい。

・もっと回数を増やしてもいいです。あとは不足するなら料金取っていただいても私は再度参加したいです。

今回のセミナー参加をきっかけに、あなたが新たに何か取り組まれたこと、始めようとしていること等あれば教えてください。

- ・看護という自身の専門分野と多文化への理解を深めた経験を統合して、災害時や病院受診などで地域の外国人への支援がしたいと思うようになった。介護職を目指すために外国から来た方へ、教員として指導することもあるプランとして考えたい。
- ・日本語教師について調べることに
- ・所属校の生徒へ学んだことを紹介
- ・日本人と外国人の人が気軽に集えるゲームやプチカフェの会などを企画したいと思っています。
- ・地域での日本語教室ボランティア
- ・多文化について考える授業を、来年度教員となったら実践したいと思った。外国籍児童の学習支援サポーターにも興味はあるが、自分自身の外国語や日本語力に不安がある。
- ・もっと知識を増やしていく必要があると感じました。
- ・在学中の大学には、たくさん留学生がおられるのですが、私自身勇気がなく話しかけられずにいました。しかし、相手側も同じ思いかもしれない、自分だけで解決せずには「知る」ことが大事だということを知り、さまざまな交流イベントに参加しました。今では、ウクライナから日本に留学してきた女の子とお昼ご飯と一緒に食べたり、遊んだりして過ごしています。その際に、簡単な日本語、関西弁なども教えながら日々一緒に過ごしています。
- ・情報収集・発信、ボランティア探し
- ・多様性についての教材づくり、国際理解教育の授業づくり
- ・今回のセミナーや例会でお知らせいただくオンラインセミナーにいろいろ参加してみて学んだことを授業で実践してみたり、きっかけをたくさんいただきました。これまでの学びを整理して授業実践していきたいと思っています。
- ・京都の国際協会の日本語ボランティアに参加することにしました。もし滋賀でも何らかされているのであれば協力したいです。
- ・特になが、周囲にこの経験を話したりしている。
- ・まだ特にはありませんが、ニュースなど日本に住む外国籍の人の意見や考えを知るようにしています。
- ・今回のセミナーで知ることの大切さを身に染みて感じました。大学の図書館が利用できるうちに、本を読んで、もっと知識を増やしていきたいと思っています。
- ・来年度、勤務先の学校で希望者向けの土曜講座にて、得たことを基にしたワークショップをしようと企画しています。
- ・shigirls make world peacefulというInstagramでみんなが共に笑って過ごせる世の中にできるように異文化について多言語で発信している。また、もっといろんな文化や宗教、環境などいろんなことから生まれる意見の違いを知りたいと思った！なので、外交官プログラムというものに応募しようと思った！

- ・日本語指導者養成講座への参加。12月に始めました。国際協会や災害時外国人サポーター研修の受講を始めました。

(以下、サポーターより)

- ・今はまだ特にありませんが、色々気づかされて、いろんなテーマについて勉強不足だということがわかりました。まずはいろんな視点から気になったものについて勉強できたらと思っていますので、第一歩になったと思います。
- ・日和(学習支援教室)のボランティア活動への再参加と日本語指導者講座の情報収集。過去に日本語教育能力試験を一度受験しましたが、不合格でしたので、また勉強できる機会があればいいと思っています。
- ・社会問題に目を向けるようになり、他のボランティア活動に参加するようになりました。また、国際交流活動において、気軽に自分がこういうセミナーに参加したことがあって、何があったのかをシェアできるようになりました。
- ・滋賀県内の状況を把握する。ファシリテーションの勉強。

その他、コメントなどありましたらご自由にお書きください。

- ・企画から開催までありがとうございました。参加日が少なく申し訳ない気持ちでいっぱいですが、協力隊OBとして自身の経験をぜひ滋賀県の教育に還元したいと思います。近江八幡で開催された県教員向けの研修で大森先生と出会えてほんとに良かったです。ありがとうございました！！来年度も参加できれば嬉しいです。朝鮮学校の校長先生の言葉にありました「我々だけでは限界なんです。皆さんには我々を守る義務があります」この言葉を胸に自分にできることをしていきたいと思っています。
- ・とても素敵な学びの場をありがとうございました。
- ・非常に内容の考えられたセミナーでした。企画していただき、ありがとうございます。今後も継続開催されることを期待しています。
- ・これまで大変お世話になりました。連続セミナーを開催していただき、本当にありがとうございました。セミナーを通して様々な方と出会うことができたこと、自分の視野を広げることができたことを大変嬉しく思います。知ったことを多くの人に伝えられるよう努めてまいります。ありがとうございました。
- ・土日は、仕事があつたりするときもありますが、引き続きいろいろなお知らせ等お知らせいただければ幸いです。お手伝いできる事があれば協力させていただければと存じます。間に合わないかもしれませんが・・・
- ・滋賀県国際協会様、素晴らしいセミナーを開いていただき誠にありがとうございました。
- ・本当に貴重な機会をありがとうございました。とても楽しく学ぶことができました。得られたものを今後に生かしたいと思います。
- ・とても勉強になったセミナーでした。参加者の方とまた関わる機会があると嬉しいです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。
- ・様々な職種の方と関わる機会がなかなかないので、とても貴重な出会いになりました。また、同じことに関心を寄せていることで、親近感が湧き、とても楽しく学ばせていただける環境でした。このようなセミナーを企画していただき、本当にありがとうございました。

- ・半年間ありがとうございました。
- ・このセミナーのおかげで、自分が将来いろんなルーツをもつ人たちと共に仕事をしたいと思えるようになった。また、今の時点からもっと異文化や他の人たちの考え方を学んで、大人になったときに、その人たちの意見を理解できる人になりたいと思った！いろんな人の意見や考え方を理解してみんなの力を引き出せるような人になりたいと思えるきっかけになりました！ありがとうございました！
- ・次も面白い講座になると思うので、参加したいです。

(以下、サポーターより)

- ・全ての回が非常に勉強になって、参加できてよかったと思っています。
- ・この度は貴重な機会をいただきありがとうございました。また、ご縁があれば継続的に国際協会の活動に参加させていただければと思います。
- ・今回は参加させていただきありがとうございました。自分だけでは見に行けない場所や聞けない説明を聴ける貴重な連続研修で、魅力的なプログラムでした。

グループ発表に対する来賓からの感想

- ・G1、G3の地域社会との関わり、参画に対する考え方や姿勢に感動した。
- ・発表者の皆様、大変興味深く、多文化共生を実践するための示唆に富んだ発表をありがとうございました。

グループ①：個人と組織の視点でのアクションプラン、興味深かったです。個人でのアクションを組織と協力してやっていくことで可能性が広がるように思いました。改めて日本人である私たちですらも地域に関わっていくことがハードルが高いように思いました。自分が地域に関わっていく中で、外国籍の方も誘って一緒に関わっていけるとよいのかなと思いました。

グループ②：「自分ごとにしていく」ことや当事者意識を共有することは大切ですね。お互いを知り、交流して問題解決を一緒に考えることで、お互いが無意識にもっている偏見や固定観念に気づくことができ、プロセスの中で関係性が変わり、「自分ごと」になっていくきっかけが得られそうですね。

グループ③：足元のリソースをどう生かして多文化共生を推進していくか、参加された方の見方や理解が変わったように、周りの人もそれを体験していく機会の創出が大切ですね。お互いのことを知る機会もよいですが、第3者が入って、双方とも知らないことをやってみると対等な関係で関われたりするのかなと思いました。

グループ④：多様性の尊重と集団の決めごとのバランスをどう取っていくか難しいですが、決めごとの背景や枠組みを見直すことで、多様性を尊重できるあり方に変えていけるヒントが得られそうですね。外国籍の方のために何ができるかといった「対象」として関わるだけでなく、外国籍の方と一緒に地域の課題に取り組むことで多様な視点からの解決策が得られそうですね。

グループ⑤：自分のルーツを肯定的に捉え、自分のアイデンティティを大切にすることは在日朝鮮人の方だけでなく、すべての人にとって大切にされる必要があることだと思います。歴史をどう解釈するか、現在の社会や自分とどうつなげて理解するか、歴史の見方についても考えることが大切ですね。多様な関わりの中で対等な立場でお互いを尊重しながら生きていくことが重要であり、そうした学びの場をつくっていくことが大切だなと思いました。

- ・皆さんそれぞれが、自分ごととして考え、明日から何ができるのかという観点に落とし込んで考察をされていて、とても聞いていて刺激になりました。
- ・受講生の皆さんが外国人との交流ということを発表されていましたが、受講生が捉えている外国人って誰？ 実習生、留学生それとも定住外国人。対象によって、「交流」の仕方がちがうと思います。3F（Food、Fashion、Festival）からの飛躍を期待します。
日本人と外国人コミュニティとの交流を考えておられましたが、私は5つ以上のコミュニティに集まっていただいて交流会をしています。ベトナム、フィリピン、韓国、インドネシア、そして日本。日本も参加コミュニティの一つ。日本人の人数は制限しています。そのような面の交流も考えてください。
- ・学んだことを机上論で終わらすことなく、アクションを取るところまで考えをまとめていて、とてもよい学びをされたと思いました。すでに、実際にアクションを取られた方もいらっしゃると思いますが、多くの方はこれからだと思います。すぐに実行は無理でも、できることからやっていって欲しいと切に願っています。聞いているこちら、とても刺激を受けました。ありがとうございました。
- ・たいへん楽しみにしていた部分です。若い方々がすばらしい考え方を持っていらっしゃることに感銘を受けました。戦後の在日の方々からニューカマー、そして今増えつつあるムスリムの方、外国人との共生はいつも問題が生まれますが、実際に会ってみれば同じ人間同士です。どのように歩み寄って理解しあえるのか、多様なアプローチの仕方があることを感じました。
- ・若い方々が色々と活動されていることに感心致しました。活動されていることがもっと世間で認知されていけばよいと思います。例えば、ポスターにして図書館とかの公共の場に貼り出すとかすれば、もっと認知度は上がり、協力者も増えると思います。

あとがき

連続セミナー修了時に、「知ることが大切だとわかった」「学び続けていきたい」「学んだことを伝えていきたい・伝えられるようになりたい」と、受講生の皆さんが口々に話されていたことが、とても印象に残っている。

今回のセミナーを企画するにあたり、知ってほしいこと、教えたいことは山のようにあったが、そこをぐっと堪えて「学ぶ機会を提供する」ことに徹するようにした。それは、受講生自身が現場を見て、肌で感じ、新たな出会いや知らなかった知識を得ながら、そして周りの人たちと意見を交換していくなかで、自ずと地域の現状や課題を見出し、よりよい社会にしていくなための解決策を模索してくれることを期待したからである。

それに応えるかのように、最終発表会での各グループの発表はいずれも地域課題を知るだけに留まらず、自分事として捉え、行動に移していくところまで考えられていたことを大変うれしく思う。

ますます多様化する地域社会やあらゆる距離が縮まる国際社会において、SDGsのスローガンである「誰一人取り残さない」世界、「すべての人がより良い生活を送れる」社会を共につくるため、本セミナー修了生にはこれからも学び続け、活躍の場を広げ続けてもらいたいと願っている。

さいごに、本セミナー開催にあたり、快く訪問を受け入れてくださった皆様はじめ、サポートしてくださった皆様方に心より御礼申し上げます。

公益財団法人滋賀県国際協会

2022 年度 次世代人材育成事業 『多文化共生×SDGs×開発教育』連続セミナー報告書

発行日	令和5年(2023年)2月
発行	公益財団法人滋賀県国際協会
	〒520-0801 滋賀県大津市におの浜1-1-20 ピアザ淡海2階
	電話 077-526-0931
	FAX 077-510-0601
	E-mail info@s-i-a.or.jp
	URL https://www.s-i-a.or.jp
印刷	株式会社スマイ印刷

この事業は、一般財団法人自治体国際化協会の助成により実施されています。

